



KYOTO DESIGN CONFERENCE 1987

みんなで語り合おう

第7回 京都デザイン会議 会議録

建都1200年へ
スーパーデザインング '87



第七回 京都デザイン会議・会議録

昭和六十二年三月二十九日(日) 日図博物館 岡崎・京都市伝統産業会館三階



第七回「京都デザイン会議」委員会構成（順不同）

主催／京都デザイン関連団体協議会（京デ協） カッコ内は略称

社団法人日本図案家協会（日図） 京都服飾デザインナー協会（KDK）

社団法人日本デザイン文化協会京都支部（NDK） 京都伝統産業青年会（伝青）

京都インテリア産業協会（KIS） 社団法人京都デザイン協会（KDA）

京都室内装飾設計士協会（室内） 協同組合京都クラフトセンター（KCC）

京都建築設計監理協会（建築） 社団法人日本グラフィックデザインナー協会京都地区（JAGDA）

社団法人京都国際工芸センター（ICC）

運営委員会

委員長 柴田 献一（京デ協代表幹事・KDA理事）

委員 団 武夫（日図会長） 上田 年子（KDK理事） 阿部コオイ（NDK京都支部長）

川島 美恵（伝青会長） 川島 春雄（KIS会長・ICC理事） 野口 茂（室内会長）

南澤 弘（KCC理事長） 畠中 繁（建築会長） 田積 司朗（JAGDA京都代表幹事）

実行委員会

委員長 今西 慧（KDA副理事長）

企画・運営委員

西村 好雄（日図） 熊谷 實（日図・NDK・パティ兼務） 小山 道子（KDK）

谷口 主嘉（伝青） 本郷大田子（KIS） 山本 竜一（KDA） 尼川 恵一（室内）

森 勝久（KCC） 道家駿太郎（建築） 橋本 繁美（JAGDA） 小川 幸雄（ICC）

広報・動員委員

佐々浪昌夫（日図） 山本 次枝（KDK） 村上欣美枝（NDK） 井上美恵子（NDK）

谷口 秀二（伝青） 岸本 康志（KIS・記録兼務） 尾崎 要（KDA・財務・パティ兼務）

大木ミヤ子（KDA） 藤川 一光（室内） 篠持 弘（KCC） 満野 久（建築）

大野 好之（JAGDA） 黒竹 節人（ICC）

後援／京都府・京都市・京都商工会議所・勸業安建都二〇〇年記念協会・大阪通商産業局・勸日本産業デザイン振興会

財団法人デザイン交流協会・京都経済同友会・京都青年会議所・京都織商青年部・京都新聞社・朝日新聞社

毎日新聞社（支）大阪読売新聞社（支）サンケイ新聞社（支）日本経済新聞社（支）日刊工業新聞社（支）

日本工業新聞社（支）日本繊維新聞社（支）織研新聞社（支）共同通信社（支）時事通信社（支）京都リビング新聞社

NHK京都放送局・KBS京都・毎日放送（支）朝日放送（支）関西テレビ放送（支）読売テレビ放送（支）

テレビ大阪（支）オール関西・関西デザインニュース社（順不同）

協賛／京都銀行・京都信用金庫・京都中央信用金庫・伏見信用金庫・西陣信用金庫・京都相互銀行・南京都信用金庫（順不同）

スーパーデザインング'87

建都一、二〇〇年へ

●第七回京都デザイン会議 会議録目次●

建都一、二〇〇年記念事業構想

木下 稔

4

反時計回りのすすめ

柴田 献一

8

全員参加 九分科会トークセッション

13

●第一分科会 へ国際情報基地・京都へ

日図・NDK

14

●第二分科会 へ京の着だおれへ

KDK

20

●第三分科会 へものづくりから、ものひろめへ

伝青

26

●第四分科会 へ工芸情報は国際メディアへ

KIS・ICC

32

●第五分科会 へ景観都市の色彩を考えるへ

KDA

38

●第六分科会 へ京都発・1994年へ

室内・建築

44

●第七分科会 へ国際性とは何かへ

KCC

52

●第八分科会 へグラフィック・マルチパワーへ

JAGDA

58

●第九分科会 へ二条城に天守閣をつくろうへ

一般参加

64

参加者名簿

70

平安建都一、二〇〇年記念事業構想

木下 稔

(財)平安建都千二百年記念協会
理事長

創造的再生を目指して

木下でございます。建都一二〇〇年もいよいよ七年後に迫り、京都デザイン会議始め、各界・団体でも、この記念すべき年に向けて、種々の議論や行動が起こりつつあります。その中で、私共「記念協会」がこの建都一二〇〇年をどういう風にとらえ、活動して行こうとしているのか、そのあらましをお話し致したいと存じます。

さて、いつも言われることですが、京都が置かれている現状はどうかと考えますと、やはり、大変悪い状態であると言わざるを得ません。経済的に地盤沈下が著しく、このままでは、一地方都市へ転落ということも現実にあります。また日本が全体として抱えている高齢化社会という問題、これについても京都は十大都市の中で一番深刻な状態にあります。それと同時に、人口、教育施設、工場などが、どんどん市外へ流出しています。特に同志社、成安、平安女学院など大学が市外へ出ると、文化都市、学術都市としての特徴が薄れてくることとなります。このような情勢下で、京都は二十一世紀へ向けてどう再生し発展を図るのか、今それが求められているわけです。

それでは今から約百年前、建都一二〇〇年の時

はどんな事が行われたのか、ここでもちょっとふり返ってみたいと思います。ざっと見渡しても、内国勧業博覧会（明治政府主催・第四回・明治二十八年四月一日～七月末、第三回までは東京上野公園で、第五回は大阪天王寺で開催）、平安神宮の創建（明治二十六年地鎮祭）、平安神宮の祭礼として始まった時代祭、琵琶湖疏水の建設（明治十八年、京都近代化政策の基幹事業として着工され、同二十三年第一期工事完成）、この疏水の水力発電を利用した京都電気鉄道（明治二十七年設立、同二十八年塩小路高倉～伏見下油掛町間に仮開業、博覧会期中は岡崎の会場前まで乗り入れた）等々、大規模イベントや土木建設事業が実施されました。これは現代の我々から見ましても大変な事業でして、当時これだけのことが出来たのには、首都を東京へ持って行かれたことによる京都市民全体の危機感が、ひとつの方向に力を結集しやすい雰囲気を作っていたことが挙げられます。これに加えて当時の京都には、東京・大阪と並ぶ三大都市としての自負と力がありました。日本全体としても、欧米の技術に追いつこうという大きな目標を持っていましたから、当時の京都が次々と大事業を遂行していける心理的・経済的下地が十分にあったと言えるわけです。

それから一世紀という時間が流れて、京都のお



あ
ま
り
さ
な
な
な



かれている状況が一変したことは冒頭にお話し
たとおりです。いま京都が直面している問題は多
かれ少なかれ、この二十世紀末に各都市が共通に
抱えているものでもあります。かつて建築家の
安藤忠雄氏が——自分も二十世紀末を生きる者として、新しい世紀を迎えるためにそれなりの役割
を果たしたいと思っているが、それにしても時代
の放つエネルギーというものを考えると、二十世
紀末は十九世紀末のあのダイナミックな動きに較
べれば随分見劣りがする、もしできるなら自分も
あの時代に生きて、縦横無尽に活躍したかった——
と語っていましたが、まさに建都一二〇〇年を迎
えようとしている京都人の気持に通じるところが
あるように思います。

そこで、私共平安建都一二〇〇年記念協会が、
いまの情勢下において、記念事業を考えていくに
あたりましては、たんなるお祭に流れるのではな
く、創造的再生と申しますか、活力ある京都の二
十一世紀へ向けての出発点となる事業としなくて
はなりません。

そのための基本理念と致しまして、
『常に新しく、活力に満ち、内外に開かれた情報
社会にふさわしい、文化的創造的な都市を築きあ
げるための事業』

ということを掲げております。この理念に基き
て、京都府・京都市・商工会議所・文化人・
労働団体の力を総合してこの記念諸事業を成功さ
せたいと考えております。

その中で具体的に出て来たものとして、第一に
向島に「洛南サイエンスタウン」を建設する計画

が進んでいます。今まで市が進めてきた都市基盤
整備事業としまして、清水焼団地、東土川の工業
団地、洛西ニュータウン等がありました。それ
以降の取り組みがされず、整備事業が遅れ過ぎた
という現実があります。そこでこの洛南サイエン
スタウン計画は記念事業の中心として、京都市内
に新しいマチを創るという意欲的な姿勢を持つも
のであります。この建設計画に平行して、既に動
いております京阪奈丘陵の開発、大阪・奈良を含
めての文化学術研究都市の建設を推進してまいり
ます。この学研都市は果たして京都市にとって有
用なものなのか疑問視する方もあります。しかし、
そこでの基礎的研究の成果が企業誘致に結びつく
ことになり、近隣都市とのネットワークを持ちな
がらの総合的発展を目指すことは、古都京都の将
来にとりましてとても大切なことであると考えて
おります。その中で、洛南サイエンスタウンは位
置的に京都市と学研都市を結ぶ中間点にあり、ネ
ットワーク化を推進する上での要となるものであ
ります。





次に、市中心部の開発のたち遅れが言われておりますが、市民アンケートにも表れました京都のシンボルの地域である岡崎、この地域の整備事業も記念事業のひとつになっています。さらに今度民営化されました国鉄の京都駅も、京都市の整備事業として鉄道との協力を考えております。これは駅舎及び駅ビルを改築致しまして、新しい企業誘致を実現したいと考えております。これに関連して、現在、アバンティだけが出来ておりますが、京都駅周辺の再開発、国鉄（JR）山陰線の高架化に伴う二条駅周辺の整備、地下鉄乗り入れに对应した山科駅周辺の整備等も計画されています。

これら都市再開発、整備事業を推進するうえで不可欠のものとしまして幹線道路網及び高速鉄道（地下鉄）の整備事業があります。京都と隣接都市を結ぶ幹線道路の整備は、他都市のエネルギーを京都に導くための重要な手段であり、深刻な交通渋滞を解決するために必要なものです。市内高速地下鉄網もまた、交通渋滞を緩和し、都市景観を



保全し、京都市域及び周辺地域の価値を高めるための強力な方策であると考えております。京都の地下鉄は着工が遅かったため建設経費が大変高くつくことになりましたが、来年春には南北線の南側部分が、三年後には北部が完成予定です。また東西線は、山科から二条駅までは建都一二〇〇年までに完成させる予定であり、最終的には洛西ニュータウンまで乗り入れます。これらの道路整備は新しい暮らしと産業に寄与するものとして欠くことの出来ない事業と考えております。

複合的文化都市へ

次に京都は文化と歴史の都であり、複合的文化都市としての機能を充足することが要請されています。その一環と致しまして、シンフォニーホールが近く着工の運びとなります。また国際交流センターの建設計画が検討されています。来年十月には府立文化博物館が開館予定であり、洛西桂坂には、国立の日本文化研究センターが建設予定でして、この四月にその設立準備室が出来ております。このようにコンベンションシティとしての京都の再生を目指して、記念協会内でも博覧会等一二〇〇年目に行う事業を担当する所、またそれに到るまでの各イベント企画を担当する所と、各部に分かれて検討が進んでおります。

ところで、今までお話ししてまいりましたことに對して、より精神的な面と申しますか、施設や道路整備に限らず、歴史の都としての京都を復興するための計画もございます。そこにはまた、封



二十数万の人々にお集まり頂きました。これも京都の第一線のクリエイターの方々にお力添えを頂き、建都一二〇〇年記念のプレイベントとして成功であったと考えております。

これを出発点に、一二〇〇年に向けて次々に各種のクリエイティブな活動・行動が始まっているわけですが、最後に、今日お集まりの皆様方、京都で御活躍の各界デザイナーの方々への期待をお話したいと思います。

建支配の中で差別されてきた人々の問題を考え、解決してゆくため、人間の問題、存在の問題を考える部会もございます。また、一二〇〇年を迎えるにあたって、モニュメントを作ることが考えられております。一時は三条四条間の鴨川に橋を懸ける案が出ましたが、事業として少し規模が小さいので、替わりまして、平安の都を象徴する朱雀門や羅城門の復元等が案として出ております。この遂行のためには、福知山城が三、四万人の全福知山市民の寄付により再建されたように、一五〇万京都市民の浄財に期待をしております。

また記念博覧会でございますが、これは従来開催されてきたような産業博覧会ではなく、都市文明そのものを考えようというものでございます。京都において都市文明とは何かと考えますと、やはり学術、そして技術、芸術という三本の柱、これら都市の文明を形成する要素と市民の暮らしとの関わりを考えるものとなります。その手始めとして、昨春秋、四条の人間広場を再現致しまして

御承知のとおり今の日本は円高の波に揺れ、貿易黒字九〇〇億ドルという状況の中で、国際摩擦が激しくなっております。この危機的状況を解決するために目指すべき日本の方向は、従来の工業化社会から脱皮した新しい産業社会だと考えております。これは別の角度から見ますと、消費者側の需要が多様化しているにもかかわらず、供給する側がまだ十分それに対応出来ていないということです。それこそ、京都の中心的産業である各伝統産業が抱えている問題です。すなわち高度な技術や品質を維持しているにもかかわらず、デザインや機能の面で現代人の要求に十分対応しきれていないということ、そのギャップにこそ、皆様、各界デザイナーの方々に御活躍頂く場がございます。皆様方の新しい発想と感性によって、この沈滞した状況に活力を入れ、新しい需要の展開を目指す、それこそ、現代の京都が、そして日本が求めている活路であり、デザイン界に求められているものであると思います。本日のデザイン会議がこの可能性を一步進めるものとなりますよう期待しております。ありがとうございました。



反時計回りのすすめ

柴田 献一

主催者代表

京デ協誕生

皆さんこんにちは。いよいよこのデザイン会議も七回目を迎えて、「七五三」で言えばお姉ちゃんのお祝いの時期になりました。

今年第七回京都デザイン会議開催にあたり、本年はあらたに三団体（京都室内装備設計士協会・京都建築設計監理協会・社団法人グラフィックデザイナー協会京都地区Ⅱ JAGDA）の加入があり、これまでの八団体による京都デザイン協議会から、計十一団体による京都デザイン関連団体協議会（京デ協）が新発足し、その主催によるデザイン会議であるという大きな変化をまず申し上げたいと思います。そこでこの「京デ協」発足に到るまでの経緯と申しますか、なぜこうなったかということとをちょっと御説明申し上げます。

これはつまり、ニワトリが先かタマゴが先かという話になってくるんですが、今から八年前、WCC（世界クラフト会議）が開催され、当初は世界・所会議？ などと悪口を言われながらも、皇太子殿下をお迎えし、世界からも人を招いて、京都を挙げてのインターナショナルイベントを展開

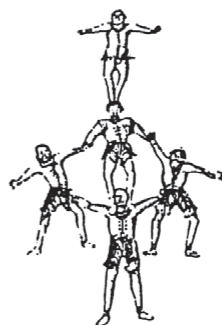
したわけです。WCCの開催は、それこそ日本の美術工芸史始まって以来の大イベントで、京都の政・財界、生産者、芸術家、つまり京都を丸ごと巻き込んだの、大事件となったのです。

開催にこぎつけるまでは大変だったわけですが、こんな大事業も目前で出来るんだという、京都全体の認識が生まれたことは、京都にとりまして大きな自信になったわけでございます。これをきっかけとして、「京デ協」の一員である京都国際工芸センターも発足しましたし、何よりも、それまで交流のなかったいろんな職業の方々が参加して共通体験を持てたことは、大変貴重な経験となったのです。この「インターナショナルイベントを目前で出来る」という自信と、高揚した気分がまだ熱い時に、七つの団体が協力して、第一回京都デザイン会議が始まりました。当時の写真を見ておきますと、私も含めて髪がまだフサフサ黒黒した懐かしい姿が写っておりまして、七年の経過が感じられます。こうしてデザイン関連団体が共同して何かをやるという動きも、WCCの遺



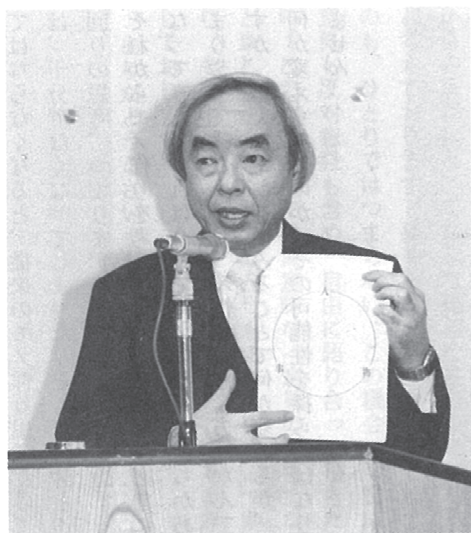
産として今日に続いているわけでございます。

私、毎年このデザイン会議が始まる前に、一号からの会議録を通読致しております、この会議がどういう流れに乗って続いて来たのかを見ることにしております。そうするとこの七年の間にずいぶん変わって来ておりまして、開催スタイルもある時は車座になってホカホカ弁当を食べながらという家庭的な会もあれば、国際会議場を借りての本格スタイルもありで、当然討議内容にも、大きな流れの中での変化が見られます。その中で、一昨年開催されました国際伝統工芸博も話題となりましたが、これは基本的に大阪のプランナーが動いての、外からの持ち込み企画だったわけですね。その時、なぜ我々が自前でやれなかったのか、なんのためにこのデザイン会議を続けて来たのか、大きな反省がありました。何とか、京都地元のデザイン関連団体が、名目じゃなく、一つに結束しなければという、各方面からの声が高くなって来

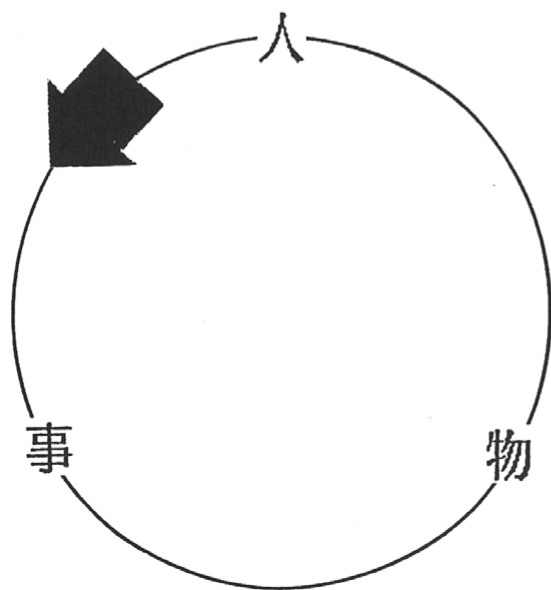
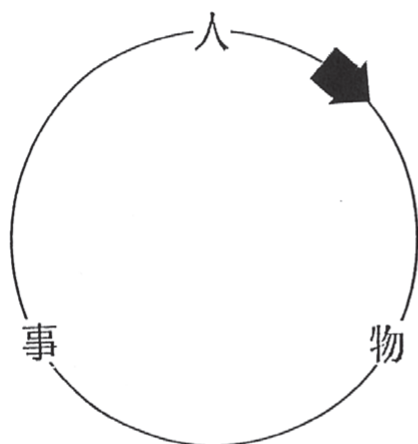


ました。そこに丁度、平安建都一二〇〇年記念協会が出来、よし、ひとつこの事業を目標にして、自前で、この記念すべき建都一二〇〇年のイベントをやり遂げようじゃないかという気運が盛り上がりまして、昨年五月一日に九団体が結束しての、「京都デザイン関連団体協議会」発足となったわけでございます。この発足を機に、「建都一二〇〇年記念協会」と「京デ協」は一身同体となると申しますか、さしずめ、本日のデザイン会議は、両者の婚約発表式と申し上げて良いかと存じます。

さて、本日これから、各分会に分かれてのセッションがあるんですが、私共デザインを業とする者の未来運動について少し申し上げたいと思います。これまで、デザイナーの仕事と申しますのは、いわゆるモノ作りでございました。従いまして、デザイナーの間で出て来る議論と言いますのは、デザイン論であり、装飾論であったわけです。人として、いかに美しい物を作るか、人は物を美しく



MEDIA



コト作りへシフトする

これからの大イベントであります建都二二〇〇年記念事業も、まさにこのコト作りでございます。

装えるか。人がモノを作り、それが集積して社会が全体として美しくなる。この論理の流れの中では、モノ論が出来ないと、一人前のデザイナー・クリエイター、また職人になれなかったわけです。そこにある思考パターンは、『時計回り』のと言いますか、正攻法だったわけです。こういうモノ作りの人々と、コト作り、つまり企画プランニング等の人々とは、仲々意見がかみ合わなかったのです。ところが、潮流が変わったと申しますか、大事業を控えて、必然的に大勢の人々が意見を述べなく

てはならなくなると、従来のモノ作り思考だけでは、十分でなくなっていました。そこで時計と逆回りの思考、つまりまずコトを起こす事を論ずる、それからモノ作りを考えて行くという形が必要になってきた。これは今までモノ作りの人たちがあまりやって来なかった、不慣れな思考方法なんです。が、敢えてそれを試みることで何が変わるか、何が変えられるのか、その可能性を探らねばなりません。

今までモノ作りに精出して来た人たちが、この思考の逆転によって、何か面白いことが出来るので

MEDIA

はないか。真近に迫りつつある大イベントを、このコト作りの発想でアプローチすることで、真にクリエイティブなものにして行きたい。この好機に、何が変わるか、何が変わえられるかに、我々のこの集いに対する評価というものが生まれて来ます。今日の私のオリエンテーションの中心と致しまして、この「反時計回り」の思考というものを強調したい、どうかこの発想で今日の会議の中身を作り上げて頂きたい、と考えております。

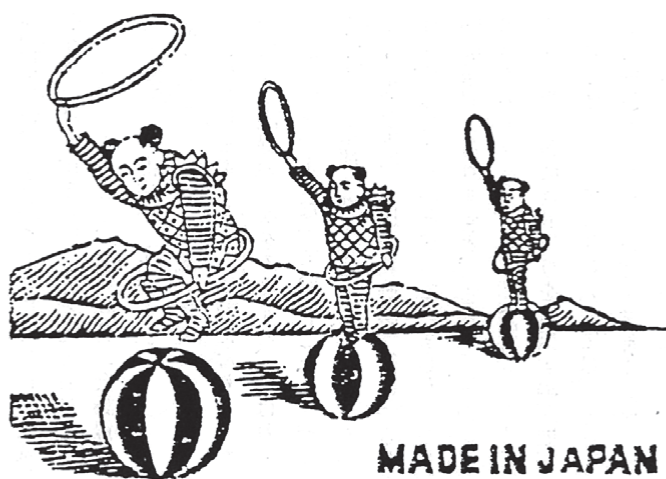
それにつきまして、前六回分の会議録を検討してみますと、面白いことにそのテーマがやはり「モノ」から「コト」の流れに変わってきていることがわかります。もう六年前になりますが、第一回目の会議録の目次をみますと、やはりモノ作り——造形論が主となっていて、デザインと文化開発「京都スタイル誕生」「ファッションルーツ」「美の集約」「比較装飾論」等はっきりモノ作りを意識したものとなっていました。これが第五回会議録となりますと、「京都・二足のワラジ」「京都のイメージチェンジ」「関西コリドールプラン」等々、明らかにコト作りを目指す論が展開されております。そして昨年第六号では、「つかしん・マチの創造」といい、「京都・美都市計画」といい、もうハッキリとコト作りが意識されたものでした。この「つかしん」のコンセプトをみますと、従来のように、モノを売ることが優先していない。むしろそこにヒトが集まって来て、遊んで貰いたい。

そういう空間・マチを造りあげて、そこで高質なユーザーを育て、そこに上質なモノを供給する。目先の利益じゃなく、こういう遠大な視野があったわけです。

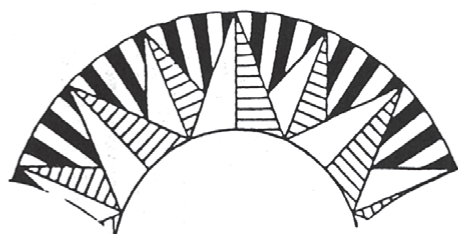
今日お集まりの方々は、当然モノ作りに関わる人が多いんですが、ひとつ、反時計回りの発想で、この会議を盛り上げて頂きたいと思います。

最後に、このデザイン会議というものの、これだけ広いいろんなジャンルの人が一堂に集まる機会というのは、本当に少ないわけです。近畿各府県を通してみても、ほとんど見あたりません。しかも集まって来る人たちは、経営者であったり、生産者であったり、また職人さんであったりと、つまり「市民」が参加している会議であるというのはとても素晴らしいことじゃないでしょうか。このデザイン会議という名の花見を楽しみ、デザインという花を愛でる知的な京都人たちが、こういう機会を通してネットワークされることが、これからの京都にとって非常な価値を生むことになると考えております。夢を語るのも、グチをこぼすのも、ひとりではつまらない。この機会に、賛成意見も反対意見も含め、自由に語り合って頂きたい。この会議の中では無意味な「意見の調整」など致しません。ぶつかり合うものは大いにつかり、その中から大きな共感が生まれることを期待しております。

ありがとうございます。



MADE IN JAPAN



全員参加
九分科会トークセッション



国際情報基地 京都

ケンゾーはフランス人

イッセイは日本人

イッセイの神話

一枚の布

キモノ ケサ

日本＝京都

パリ・コレ異変

中沢 中沢と申します。私は自宅で洋裁教室をやりまして八年たちますが、口コミで新しい生徒さんが年に何人か入って来られるんですけれども、お嫁入り支度の方とか、また将来仕事にしたいとかいうことで、真剣に取り組んでおられる方がありますので、そうした方々に接しておりますと責任を感じることがありますので、自分を磨かなければとか、より魅力的になりたいということ、そのチャンスがあればできるだけ参加したいというような立場で今日参加しております。

高瀬 NDKに所属させていただいております高瀬です。私も仕事としては専門学院で服飾のほうの教える立場で、それから自宅で洋裁教室をしております。NDKに入っているいろんな分野のデザインをしている方たちとご一緒させていただいて、いろいろ自分自身に大いに刺激を受けたい、そういう気持ちでNDKに五年前から入らせていただいております。

熊谷 そろそろ本題に入っていきたいと思います。そしたら村上先生、ちょっと。

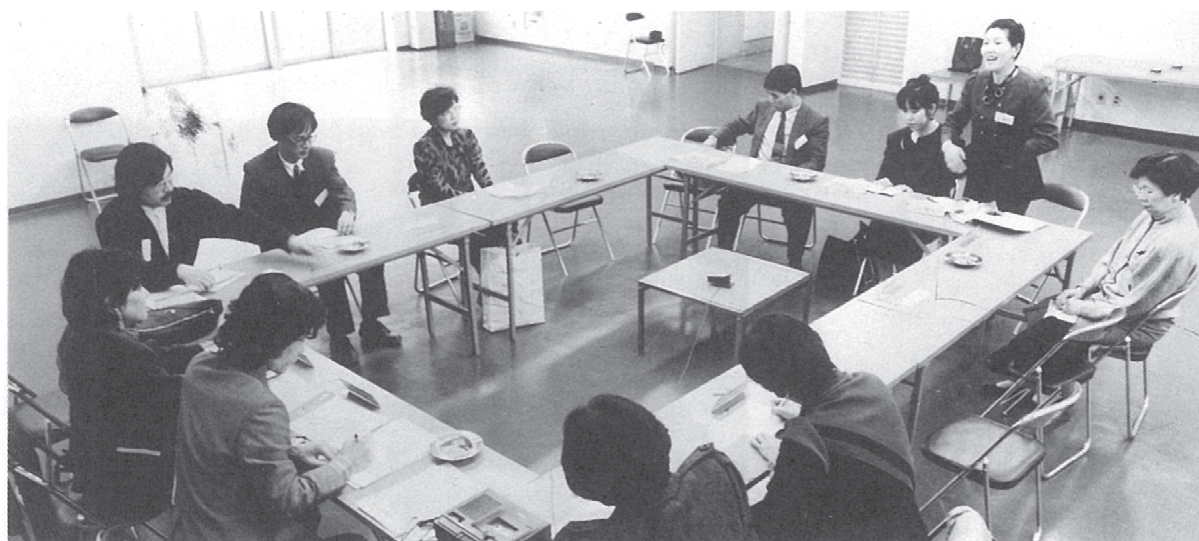
村上 一昨日の晩にヨーロッパから帰ってまいりました。ちょっと自己紹介させてもらいますと、ウェディングドレスのデザイナーでシャルム商会というのをやっておりますけれども、何年前か、もう随分前になるんですけど、パリコレクションを見せられまして、それで一応特派員という形で一つの媒体の取材をかねて、また自分の買いつけや、それからライセンスの仕事、そういうものを

兼ねましてちょこちょことヨーロッパへ出向いております。今もぼちぼち老骨に鞭打ちながらというようなところでございますけれども。

仲 洋服関係にいるんですけれども、実は今日着物を着ようと思ったんですけど、どうしてもなかなか着慣れないとか、面倒くさいという気持ちがありますよね。それで今なんかせっかく京都におりながら、着物と、この間も着物地で洋服をつくったショーなんかも一点ですけださせていだいたんですけれども、着物地で洋服をつくるか、着物自体の原型をくずして洋服にするか、というのを自分で今すぐ悩んでいるんです。

高瀬 京都の国際性という問題ですけど、考えてみますと、私、愛媛の出身ですが、やっぱり京都人としてのなんかそういう「性格」みたいなものにもうちょっとズッコケた部分があって、そういうものがおおっぱりにパッと出せば、京都以外のところへもっと発展させていける部分があるんじゃないか。なんか京都人というのは、ツンとすましていうんですか。それと外には自己主張しているんですか、あまりされずに内面に非常に自信をもって、そして人がいろんなことを聞いた場合に、なんか素直にパッと出さずにね、いや、わからへんねん、とか、かなりそういう部分が邪魔をしているんじゃないかなって、そういうことはちょっと感じますけれども。

熊谷 東京と京都はね、逆にチャンポンになっっているんですか、京都はやっぱりなんか一つのものづくりとしてのね、なんかよさっているのはやっぱり、京都イコール日本という感覚をものす



ごく持つてると思うんですよ。そやから、今まで日本人の感覚でいうと、やはり東京は消費の街やから、なんかそっちへ持っていって、もっと国際的な視野にたつと、当然もう京都が本社っていうんですかね、そういう根拠地にならんとおかしいと思うんですがね。

村上 宝の持ち腐れね、京都人はね。

それと同じでね、ケンゾーさんがいつも友禅見にきて、それで未だに友禅のものを使ったりとかね。で、考えられないような色をうまく合わす。あの人はフランスでは日本人じゃないんです。フランスのファッション界で、日本のデザイナーで、こっちで活躍して出てくる人で誰が一番よろしいですか？と言うと、イッセイ、こう言うわけ。ケンゾーは？ ああ、あれはフランス人だよと言うんです。

浅井 私はね、大阪なんです。大阪から京都へきて三十年になりますけれども、だから、割と、そのさっきおっしゃった余所から京都を見えるということです。で、このファッションの仕事をするようになって、京都はやっぱり伝統的に着物をやってられますんで、ファッション、着るものに関して目ができてますのでね。

向こうの人はお話して、例えばどっかへ一緒にいっても、ずっと歴史的にその話をしてくれるんです。別にそれは専門でなくても。ところが日本人は、私だけかもしれないけれども、向こうからたとえなんかちょっと聞かれても、歴史的な背景から説明ができない。恥ずかしい話ですけど。

佐々浪 これは三、四年前ぐらいですけど、お隣

の韓国であるとか、中国が非常に専門的な知識というか、基本的な知識を勉強して、こちらへ、いろんな専門の分野に派遣、民間の派遣をしていますよね。こちらもうやはり最低の知識は勉強しておかないといけないということです。

熊谷 フランスね、あちらで相撲を紹介したりとかね、柔道を紹介したりとか、やってるでしょう。それでもなんか紹介の仕方がものすごく滑稽というんか、そのポスター。

村上 でも、すごく人気あったんですね。

熊谷 そやから、知ってる人はものすごく細部まで知ってるけども、知らない人はなんかこう全然知らんという、ものすごくそれがね、差があるんですね。

佐々浪 いや、去年ね、この博物館で世界の教科書展をやったんですね。そうすると、各国の教科書の紹介がされてるんですけど、非常に日本に関しての紹介の仕方が、終戦、戦後ちゅうような感じになってるんです。畳の部屋にちゃんまげで座蒲団に座りながら、隣にオートバイが飾ってあるとかね。

村上 フランスではね、割と日本人はえらいと思うてます。十五年前に行った時はね、私らが何人かで通ってるとね、下町なんか行くと、「ジャッブ！」っていうのが聞こえました。それですごく不愉快な思いしましたけど。今はすごいね、特にファッション界ではね、八十人ぐらいのコレクションの中で日本人がその中十一人もコレクションする。そして、フランスの人でさえ、コレクションできなくてやめていく人もあるのに、日本



からあれだけの荷物をね、送って、そしてマヌカンを雇って、演出をしてやってるいうことに對しては、もうなんかやっぱりすごい尊敬の目があるみたいですね。

団 まー、熊谷君あたりから話が出てたかもわからんけどね。我々の関連してる作品を持っていた場合にもね、私も協会のこういうシステムは海外では非常に高く評価されている。というのは、ライバルをものすごく大事に育ててると。また協会で育成しているというようなことは外国では考えられないことがあるんですね。

村上 まあそれにしても、例え誰が見てもそうかもわからないですけども、結局いわゆる評判の悪いのは、誰かのコピー。そういうふうなのはもう皆バカにして、そこそこの毒だけでも、ジャーナリストも足音バタバタさせて、コレクションの会場から出ていくわけなんです。そこへいくと、コムデなんかは自分のスタイルつくりましたでしょう。だから、すごい、そういう面の人気がある。それで、イッセイさんも、生地を巻きつけた、素材的にも納得できる日本の味を出して、それで毎回見せ方もうまくやってる。そういう面でのいいわけです。

団 今度十一月に世界織物会議がありますね。あれなんかがええきっかけになると思うんですが。それと、どっか信楽かどっかで、陶芸のあれ、世界のん言うてましたね。あれもできてくるからね。京都へそういう世界的なイベント、特にデザインをもってくるような企画を考えていきたいということはありますね。京都と琵琶湖を含めて。

和の素材、洋の用

河原畑 ブライダルのコスチュームのほうをやっておりますんですけど、先程からのお話にもありましたように、京都と婚礼衣裳っていうのは、ものすごくつながりというものがある。そのデザインに関して、京都よりは東京のほうが以前は秀れていたというようなことが少し記憶に残ってんですが、いつのまにやら、京都のほうが、東京よりも優れてきたと思っております。

吉村 和の素材を洋に使えるという、なんか私の一つの感覚みたいなものをもっておるんですけどね。そういう意味で、京都っていうのは、クラフト集団だと思えます。皆さん洋服つくってられても、工芸品つくってても、お茶碗つくってても、全部クラフト集団だと思えますね。誰か、先程伝書の方が言われてたと思うんですけど。つくり手は、あるいは図案屋さんにしたって、絵を描く、着物の絵を描く、全部やっぱり京都が主導権をにぎってると思う、そういう意味では。つくるものに対しては。だから、日本の中でみた場合に京都のそういう工芸品とか、そういうもの諸々ですね。ウェディングは僕ちょっとわからなかったんだけど、今着物ということが出れば、着物に関しては日本中から皆その図案を買い求めに来るし、あるいはインテリアとして使いたい素材があれば、それ、京都が主導権をにぎっていると思うんです。ただ情報っていうものに關して、情報源が全部首都、いわゆる中央に集まってしまうっている。

村上 私も西陣ね、一回西陣でのブライダルショ



ーていうのをさせていただきました、西陣会館で。けど、結局、あとそれをどうつなげていくか。西陣の生地で作らせてもらって、私個人のプライベートショーにさせてもらったんですけど、どうつなげていくかというたらね、幅と値段の問題です。割と高いんです。

吉村 そうです。確かにね、おっしゃる通り、着物にしても一尺はいわゆる四十cmほどの幅。帯地にかんしてはもうちょっと狭くなる。そういう問題。なぜそういうことで広いものを織っていないか。織れるんですね。織れるけれども、あくまで未知数なんですよ。

河原畑 実際、西陣では安くしたら売れない、高くしたら売れるというね、そういう点が織物やなんか、着物とかにまだ残っているように思うわけですね。これは、とりあえず高級品である西陣の品物であるから、今の織物にしても、これ安くしたら売れないと。高くするから売れるとかいうのね。今のタキシードとか、ドレスとかいうことになりそうです、どうしても商売の話になって申し訳ないと思いますが、西陣で織っておられるもの、もう少し糸が細くならないのか、もう少し薄いものがあると思うんですね。私。女性の方が召しておられるそのドレス、洋装式のものはず身体について、薄く見えるものがやっぱり男性から見ても魅力であって、それが洋装やと思うんですね。ところがまた日本の古典的な西陣の織物からいえば、少しでも肌を見せないように厚くしていたのが着物ですからね。

井上 着物というたら平面でしょう、洋服いうた

ら立体ですよ。洋服の観念からいきましたら、やっぱり立体的に身体を見せるということで、ニュー着物がなぜ売れるかと言うたら、パット入れたり、それからここをずっと下げて、やっぱり立体的に見せるという魅力だと思うんですね。

河原畑 それなんです。

井上 やっぱり西洋と東洋の本質的な違いが立体、平面なんです。

熊谷 我々デザイナーとして、例えば壁紙なら壁紙のデザインとして海外へ提案しますけども、相手が選んでくれるのは、全然壁紙以外の椅子張りとか、またカーテンとか、もちろん服もそうですし、いろいろあわよくばそれ以外のね、素材的に全然違うグラフィック的な要素にもとらえます。いま衣料としての素材であっても、なんかすごく常識で考えている以上のことを、相手は逆に見てるように思うんですね。ですから、話をもう少し戻してみますと、我々京都人やから、これがすばらしいやろうとして持っていたもんでも、決してあっちは魅力感じないということを、我々やってきて思うたわけですね。

奥田 私、グラフィックデザイナー協会の理事やっています奥田と申します。八分科会におりましたんですけれどね。そこでもちょっと話が出ましたんですけれど、それぞれ職能のジャンルがあっても、グラフィックやからグラフィックだけにこだわる必要はないと思うんですね。こういう雰囲気になれるのは京都だけやと思うんですね。これ、私事で申し訳ないんですけど、実はこの間、二月末から三月まで一週間ですけども、ちょっと変わった

展覧会をやってまいりました。東京ですけど。銀座で紙飛行機の展覧会やってきました。紙飛行機というのは、割に大人の世界で愛好家がおって、絶えず研究してやっとなるわけです。それにたまたま私、子供の時から紙飛行機が好きなんで、まあグラフィックでもパッケージをやってますんで、もう、思いもかけんような形の発想の飛行機をつくったわけですね。ところが、たまたまそういう変わったもんやったからですね、マスコミが取り上げてくれないで、割に人を動員できましたのでね、そんなに見て紙飛行機の大家がとんできましてね。で、もう感動した言うてね、びっくりしてるわけですね。というのは、そういうデザイン的な発想でもって紙飛行機をつくったものがなかったわけですからね。そういうんで、今までデザイナーが入り込んでないところへ入ったもんやから、割にマスコミが騒いで取り上げてくれましたね。

そういった意味で、ファッション関係は私門外漢で、これがあたるかどうかわかりませんが、やはりなんていうんですか、発想の転換をね、いわゆる水平思考するようにして、全然思いもかけない発想でもってやられると、また案外ね、道が拓けるんじゃないかと思うんですけどね。

井上 私とて学校の学校も、私事で恐縮ですけど、服飾なんですけどね。この方面、やっぱり服飾、女性の先生ばかりいるよりか、やっぱり男性の違う枠から入ってもらったほうがいい、なんか創造的なものが入るんじゃないかということですね、去年、美術、芸大卒業の男の先生お二人にお入りいただいたんです。何教えるかということが問題

なんですけど、なんかものづくりをする共通点がやっぱりあるわけなんですよ。ですから、そのへんのところ、造形演習という、そういった項目を設けまして一年間やったけど、なんかやっぱり面白いことやられるから、割と人気があるんですよ。最終的にものをつくるという、そういった動き、そのへんが共通してる、そこがやっぱり見出せるということが結論としてわかってきたわけなんです。

コンポジション・京の技

井上 何か洋服いうたら生地ですから、生地以外のもので、着られるものをつくらせていうようなね、そういった条件でものづくりさしたら、割と面白いんですね。意外なものが出ますからね。

団 着物というのは、これでニュー着物ちゅうのが話題になってきてますね。それは恐らく着物の中で新しいスタイルが今後ずっと流行、今の流行だけと違ってね、残るもんやと思うんですね。価格的にもうんと安いですわ。まず安くできると思うんですね。あれはものの、いいもので買ったはるんと違うと思うわ。ブティックでも、ね、洋装感覚でドレス買うのと同じ感覚で買うてるでしょう。

今度のニュー着物てのが出てくるとね、それで売れるとなるとね、従来の着物の発想だけではあかんようになってくるわけです。

村上 そういう変化の中で京都のすばらしい地盤を生かして、たくさんの方の人たちを引っ張ってこれるようになると思いますけどね。



団 今年はそういうことに関してはイベントをね、府も市も抱えたはるし、十一月に集中してますからね。私とこの協会も昨日の夜に理事会でそういうのに協賛をするという意味で、この会館で我々ももてる新しい試みをやってみようという話してるんです。

村上 なんかフランスのシラクさんも出席するという、返事が来てるのか聞いてますけど。

団 歴史都市会議？

高瀬 今まで皆さんのお話を聞きまして、京都がいかにすばらしい人材が、そういう技術をもった人たちが多いかということとはよくわかったんですけど、それがどうして日本の国内において、世界に通用しないかということは、やっぱり人だと思ふんです。だから、もうちょっと人をやっぱり、個人をもうちょっと周りがバックアップして、まあ言ったら有名にさすかていう、そういう部分が、京都は特になんじやないでしょうか。

吉村 今おっしゃったこと、僕も痛切に感じてるんですけど、例えば村上さん、先生方なんか東京へ出向かれることが多いと思います。世界は別としても。日本の中で、やっぱり日本人の中で東京は東京の感覚をもった、いわゆる気質、いわゆる江戸っ子気質というのがあると思うんです。京都は京都の気質が、大阪は浪花気質というのが、皆もっていると思うんですね。僕は仕事上よく東京は毎月のように行くんですけども、根本的に違うのは、東京の人ていうのは、何かものを見る。例えばブティックでもなんでもいい。これいいじゃない、これちょうだい、が東京の人なんです。で、

流行っているのはそういうところから生まれてくるわね。ところが京都は違うのね。ものすごく警戒心があるんですね……。

熊谷 結論というよりもむしろ色々な意見を出していただいたことが今後の京都、建都千二百年に向けての歴史を創っていく一環となると思います。ですから建都千二百年にはそのへんも我々として何かやっぱり考えていきたいとは思っておりますけども、これも先程のお話のように、人を、なかなかやっぱり前に出していけないとね、いけないと思うんです。ありがとうございました。

●出席者（発言順）

中沢美代子（一般）
高瀬肥子（NDK）
熊谷 實（日 図）
村上欣美枝（NDK）
仲 絹代（NDK）
浅井 幸（NDK）
佐々浪昌夫（日 図）
団 武夫（日 図）
河原畑久男（一般）
吉村文男（一般）
井上美恵子（NDK）
奥田広幸（JAGDA）
水口あき恵（NDK）

京の着だおれ

京の「着だて」 伊達

大正ロマンティズム

元禄デカダン

着物を脱ぐ

キモノになる

偽物徘徊

所詮、おしやれは洒落

着物は着る物

西田 この頃のお客さんは皆さん合理的になられて、着だおれというような雰囲気に着物をつくっていただけるお客さんが少ないんです。

中橋 着物というのは、今の時代に機能的ではないですね。まずはそこから議論すべきじゃないかと思います。それに、後始末が大変なんです。杓から長襦袢やいろいろいる、そういうものが。また一般の値段にあわないこともあって、また若い人はだんだん遠ざかっていく。

上田 これ着だおれというのは、ちゃんとした言葉ではなくて、先程出ました京の着だおれ、大阪の食いだおれ、東京の履きだおれというふうに、何に生活の基準をおくかということですね。

河合 私ね、「京の着だおれ」という議論にしたよって、お電話いただいた時ね、京の着だおれっておしゃれというような意味におとりになってるんですけどね、倒れるということは倒産することよって。これは反語なんですよね。だから私は、「着だて」じゃないの？ 着だおれ言うたらダメでしょうって、電話で言うてたんです。で、結局、「着道楽」という言葉があるでしょう、このことなんですよね。

いま、ニューきものというものが出てまいりましたでしょう。私、昨日まで東京におりましたんですが、丸井の着物の店、あれがすごいんです。一体どういう人がね、セットになった合織の着物を買ってるのか見ていると、若いんですよ。だから、今まで二十歳代のお客様っていうのは、着

物の売場に寄りつかなかったんですけどね、松屋とか丸井とか、あのへんを見ておりますと、もう若い人が洋服の感覚で着物を着る、これは非常にエキゾチックなんですよね。自分たち今までやってなかったことだから。だから、我々が言ってる今までの伝統の着物とは違う、全然違う切り口で見るわけですよ、着物を。

深津 夢工房のほうの仕事をしています。本当はそういうほうは専門分野じゃないんですけどね。あれ、全部トータルで売るので、単品だけではやらないですよ。杓、帯じめ、それから、あれ全部こさえるのに、なんか随分大勢のスタッフで見えになりますね。だから、今んとこ、うまくいってんじゃないかという気がしていますけどね。

池田 私、じゅらくさんの展示会をちょっと見てきてるんですけどね、着物をつぶすということじゃないに、形を変えらないうことが着物が続いていくのに必要じゃないかなと。一番大事な点やないかなと。今こちらがおっしゃったように、機能的でないということがやはり私の姉なんかからのお話を聞いたりしても、それから若い人たちの話を聞いても、しんどいということがあります。河合 ようやくね、それも試行錯誤でしてね、ニューきものっていうのは、もうそれこそ戦後早くから出てるんですが、やっぱり美しくないとかダメなんです。だから、単に形を変えるだけじゃなくて、コーディネートされた美しさとか、ハーマニックな形が出てきて初めて、皆にわかったんじゃないですか。その若い人に共感を得たという。これ、大変な努力したんだと思いますよ。今



のじゅらくさんの着物というのは、あれ、帯のない、二部式の着物ですね。これは呉服屋さんの店頭で売れないんですって。ところがじゅらくは全国を持ち回りしまして、そして直にお客さんを招んできて、お客さんに直に着せた時に初めて、いやあこれはいいわね、楽だわね、ということを買ってくれて、そんならということで呉服屋さんについてきたことですね。だから、逆に言ったら、専門の呉服屋さんの手を通すよりは、一般の方たちの共感を得たために成功したとおっしゃいますね。そういうもの、いっぱいあるんじゃないかな。

池田 去年の春ですけどね、和装なんとか、ちょっと展示会の名前忘れたんですが、和装振興協会がやってる産業会館での着物ショーで、二部式の着物を舞台でやったはるわけです。もう非常にええ感じだね。からし色の、二部式で、帯は銀色で、というような、それも結ぶとこまで自分でやってね、演出がええ。パツとこう、テニスの格好のまま、それを上からパツと羽織って帰るというような感じのショーをやられてましたけどね。確かに努力されている。そういうさんがやっぱり共感を得てるんだろうと思うんですけども。

岡本 若い人は着物のコーディネートションがわからないと。だからセットになってるものを選んでるんだらうというお話もありますが、二十歳から二十五歳ぐらいまでの人がたくさん着ているらしいんです。で、もう一つは、ポリエステル系で丸洗いができる、そして上下全部揃えて、一番最初出した時は私、大丸へ見に行った時で十二万五千円

でしたね。それから今だいたい高いので二十五万円から三十万円ぐらいで売られている。そして、パツと見て、あ、これいいなと思うたら、もうそれはすぐ着れる。ですから、今の時代には適切でないかと。これは一過性ではなしに、私はずっと一割なら一割で残っていくんじゃないかなと思うんです。

小山 そういえば、洋服のトータルファッションですね。今ワールドなんかの販売方法としまして、全てやっぱりトータル的な販売方法をしています。例えばワールドに入りますと、全てセットされて、その言うなりに販売してる。そうすると間違いのない。それは雑誌や何かで宣伝する。そういうような商売がよくなっておりますね。

山本次 要するに、ニューきものが少し洋服に似通っているから、着よいんでしょね。

西川 私、去年でしたかね、KDKのファッションショーを見せていただいたんです。一つね、感動したことは、ワダ（エミ）さんの作品を見せていただきました。あれはね、京都のね、格があったこそ出来ることだし、ワダさんの作品は世界で賞をもらった、着物で賞をもらった作品です。あれはやっぱり美しいしね、完成されたもんだし、元禄時代のムードでいうんですかね、ラフで着やすく、そして日本人の体型にバランスがとれている。で、洋服も同じですけどね、和服も、伝統の良さを一つ残しておいて、その上で若向き志向にいったらいいんじゃないかと思えます。

河合 着物を着る物と考えたら、もっと自由でいいわけですよ。

西川 だから、ニューキものというのはね、なんだかね、着物のやり直しいう感じでね。やっぱり芸術性が高くないと。

エキゾチック日本

池田 この間、永六輔さんの話を人間動物園で聞いたんですけどね。昔は前で帯を結んだんです。今の着物はそれを継承してない。伝統いうのとはとも変えられへんといってますけど、実は、今の着物は昔のと随分変わってきてるんです。今の着物の形はせいぜい百年ぐらい前からじゃないですか。

河合 今の着物は太正ですよ、お太鼓をね、上のほうに上げて結ぶのは。もっと皆、明治には低かったんですよ。

上田 そして明治の頃でもね、まだなんか元禄とかいうのが流行ったりね、なんかちょっとよくわからないですけどね、母とか祖母なんかが言うのは、派手な人は、髪結いさん行って、こういう首の線の方にはこうとか、それぐらいやはりトータルにおしゃれをしたものらしいです。

稲田 私、思うんですけどね、着物にこだわりすぎてると思うんですわ、実際に。僕ら実際に着物に携わってる者ですけども、やっぱり先を見た時にね、着物はやっぱりこのままではいずれにしても先細りになってくるのは事実だと思いますね。

だから、一遍ほんままったく裸にしてみたらね、このへんは反物にも、染めあがったものをね、これを結局若い人に着せたらどういふうに着られるとかね、そこらへんをもっとデザイナーの人が

ね、やってほしいなと思いますね。例えば着物に帯がなくてもいいと思うんですね。今のジーンズの上でも着られるもんとかね。

上田 ゼロから始めてみたいということですね。

稲田 そうです。だから、安くてもいいんです、うんと。綿使ってでもいいと思うんですね、この場合はね。綿使って、結局ジーンズの上でも着られるような、例えば、外国から来てでもね、あ、これは着やすい、やっぱり日本の染めもんていいもんだなと、買って帰れるようなもんがほんと欲しいと思うんですね。

ただ僕らもちゃんとする時にはやっぱりネクタイしていかねあかんし、きちっとしていかなあかん時はやっぱりきちんとしてなあかんでしょう。それと着物も一緒と思うんですけども、ただ、今は普段着がないと思うんですよ。その普段着は、もっと形を崩してもいいし、もっと着やすい、素材ももっともっと安いもんでいいと思うんですね。そうして、その人たちが三十代、子供ができた時には入学式とかに、帯きちっとしたもん着ていけばいいと思うんですね。いきなり若い人にも帯して、こうしてと着せようと思うから、僕は間違いだなと思うんですね。

岡本 それがスタートラインのニューキものという形なんです。そこからスタートしていくんではないかと思うんです。

河合 やっぱし着るということは、こんなに自由なんです、というね、アピールをしないとダメなんです。その時点です、今は。

西川 今ね、ピンクハウスとかね、ビギとか、あ



あいうね、ブランド志向でこの頃やってるでしょう。今これ半分ぐらいに売上落ちてるんですよ、東京だって。もうそろそろ個性志向というのか、なってきたいますからね。そこをうまくつかまえたほうがいいんじゃないのかしら。

河合 そうですよ。もっと自由であっていいんですよ。自由にね、いろんなことをやっていいし、それからブティックで売ってもいいしね。で、私、まず初めに、自分も含めてやっぱり着てみたいとダメだね。(笑)

だから洋服ダンスの中にね、洋服入ってるでしょう。その洋服ダンスの中にあの着物が入った時はんものやと思うの、私。それをわざわざ着物やと思うて違うとこ入ってる限りはあかんですよ。西川 一月、二月ヨーロッパ行ってきてね。カルダンの男性のショーを見たんですけどね。男性の服はもうこの頃真っ裸の上に毛脛出して、胸毛を出して、背広をボンと着せて出てきますよ。そんなようなファッションが、もう向こうで出てるんです。だから、概念的に、日本の着物と同じで、英国の伝統で決められた背広というのが、今まで日本に定着してますけど、向こうではそういう感じです。

稲田 ちょっと今お話出たので、男の人も着物を自由に着られるね、そういう店があってもいいと思うんですね。そこらへんから考えるとね、僕らより、うんと高いものを着てますわ、二十歳前後の子というのはね。そのへんが着物では結局上っばりですかね、それを、いろんな形でもっと自由に着られるようになってくると、女性も必ず動く

思うんですね。

山本次 結婚式にね、皆タキシードとモーニングで出ますけどね、やっぱり若い子、うちの息子もこの間結婚した時に、やはり紋付、羽織袴というのを着たがりましたよ。あれで、やっぱり着たらしい男に見えたしね。(笑)

西川 そら伝統の血がそうさせるんですわ。さまになります。若い女の子でもね、着物着せるとね、外人に着せるのとひと味違いますね。

木曾 それとニューキものが、今売れてるっていうことを皆さんおっしゃってますけども、確かに売れている。じゃ、そのニューキものというものを皆さん何かということをおっしゃったら、二部式から、それから今のポリエステルまで全部含めてニューキものとしておっしゃってます。でも、そうじゃないんですね。今売れてるニューキものというのは、まさしくそのポリエステル素材の着物なんです。今僕らが着ている着難い着物が、ただ素材が変わって、色が変わっただけなんです。別に着やすくもないですよ。で、二部式の着物は、若い女の子は、ニューキものとしてとらえていない、ところが我々、要するにある程度の年齢に達した以上の者は、それ全部一緒にして、ニューキものというのとらえ方をしている。ここにも少し発想の違いがあるんですね。

木曾 そのセットについてもですね、これが数年したら、もうそうじゃなくなりますよ。着物は夢工房、帯はどこそこ、何はどこそという形になります。僕ここで断言するんですけど、そうなりますよ。今は、ただ今は始まったばかりだから、

セットになってくるんです。なぜ、そういうことが始まったかということは、若い人たちは先程おっしゃったように、エキゾチックなんですよ、日本が。彼らは従来の日本人じゃないですね。だから、そこらへんをはきちがえたら、よくないんじゃないかなと思いますね。

西川 ああいう辻が花染とか藍染ね、あれはね、私らの業界、私ら洋服やってきてね、やっぱりその素材を生かしてね、ニューきものでなしに、ニュー洋服ですわ。外国へ持っていく場合ね、この間、韓国へ持って行ったんですけど、反対に韓国からは、キルティングのものをどんどんもってきましたね。だから、やっぱりその国で生まれた生活の知恵の服が洋服化されたものでしたね。

稲田 着物の場合はね、絶対に一つの要素があると思うんです。着物の形にした場合ね、品があるということも絶対条件やと思うんですね。結局服でない味を味わうんですからね。だから、それはずれると、絶対おかしいってなってくるんです。河合 成人式というのがありますね。あれが着物業界のドル箱だったんですね。それが最近程んどレンタルになっちゃったの。やっぱり時代の流れですね。

衣の源流から

田村 さいぜんから話聞いてましたらね、ニューきものは従来からの着物に対して、異端というか、違うみたいな感じで、お話ししておられますわね。今のニューきもの場合はね、若い子がもうおしゃれという感覚で求めておられるんでね。着物と

いうイメージもあるけども、それよりはずっともおしゃれのほうのパーセンテージのほうが多いような感じでね。

山本次 うん。だから、着る物という感じでね。

小山 これから洋服も着物も、着て行く場所がないことには発展しませんし、その着る場所ということですね。そして目的、着る場所、そういうようなところがたくさんあると必然的に売れていく。河合 いま、旅をしたいというのが一番なんです。特に、四十、五十、六十の人たちね。京都へいらっしゃる方多いですよ。なんか京都にいる人は行くところがないって言うたらおかしいような感じがすけど。

山本達 まあ私の京都の事務所が北山にあるんですけど、日曜日なんか仕事で忙しくて出ていったら、もう人があふれてますよ。だから、確かにうちの息子なんかでも、どこへ行ってるのかしらんけど、朝出たら晩まで帰ってこないぐらい行くところがいっぱいあるんでしょうけど、いわゆる四十以降ぐらいの熟年といえますか、中年なんていうのは、京都でそういう着飾っていくホテルもないんじゃないですかね。

僕は一遍自分がタキシード着る回数の合計をとってみたんですけど。回数とどういう目的で着たかというと、一年間のうち京都で十二回ほど着て全部結婚式です。いわゆるパーティというのはないんです。だけど、大阪や東京はそうじゃなくて、そういうものを着ていくパーティがありますね。

それと、あのあたりいくと、やはり女性もカクテルドレスなんか着られても似合うような、「空間」



がありますけども、京都のホテルで、カクテルやイブニングを着られても、あんまり雰囲気的にも合うような感じじゃないですし、その後もちょっとどこか行こうかなということも、中年、熟年が行くような場所は、決してあるとは言えないと思うんですけれども。

稲田 外国から来てもね、実際京都では、ね、指揮者にしても、すばらしい人がきてても、京都では弾くところがないと。結局皆東京なり、大阪なんです。

辻 いろいろな意見を伺いまして感じましたんですが、私の青春時代はモンペをはくというふうな時代でしたんですが、過去を振り返ってノスタルジックかも知れませんが、原点を見つめて、それからまた新しいものが芽生えると言いましたろうか。いいものは残すとか、おっしゃっていましたけれども、私はある会社におりましたんですが、向こうから、フランスのデザイナーが一月に何回か出てきてたんです。そしたら彼女たちは何を買って帰るかといいますと、おかしいんですよ。労働者の、皆さん紺のモンペとか備後とか、そういうふうな、岡山で作られたような紺、ほんとの紺じゃないんですけど、イミテーション紺とか、半纏とか、あれをすごく喜んで持って帰るんです。おまけに地下足袋ありますね、あれもたくさん仕込んで、これも安い、あれも安いと言ってね、いろいろ持って帰りました。ですから、もっと足下を見詰めて、いいもの、いいものと言いますけれども、そのへんのこともなんかの参考になるんじゃないかと思えます。きれいなものに憧れるという

ことの逆になりますけれども、これも新しいひらめきの原点になるんじゃないかと思えます。

塩山 先程からニューきものが出ておりますが、これは洋服と着物との中間で、相乗的な感じが致しますんです。着物は着物でとってもいいところがありますし、洋服は洋服で、機能性とかいろいろいいところがございますので、全然別なその着物から脱皮した、洋服から脱皮した一つのデザインを、新しいデザインをつくりたいと思うんです。

小山 この衣服にはクラシックなものと、流行のものと、二つの立場というものがございます。で、流行ばかりに流れずに、ほんとのいい暮らし、基本になるものを忘れないで、衣服というものの極限までいけたらなと思います。

今日は長い間、ありがとうございました。

●出席者（発言順）

西田永子	（一般）	田村義一	（日 図）
中橋貞子	（KDK）	山本達哉	（建築）
上田年子	（KDK）	辻 美菜子	（KDK）
河合 玲	（KDA）	塩山秀子	（KDK）
深津昭夫	（日 図）	大北捷一	（日 図）
池田敏彦	（一般）	梅沢弘子	（KDK）
岡本 透	（一般）		
小山道子	（KDK）		
山本次枝	（KDK）		
西川昭子	（一般）		
稲田勝彦	（一般）		
木曾宗統	（KCC）		

伝青

ものづくりから
ものひろめへ

伝承新新形

祖父から孫へ

師から弟子へ

メディア・ミックス

所作・パフォーマンス

ミステリ・アクション

座・伝承 ザ・伝承

生活空間での工芸

谷口主 私、伝統産業青年会の谷口主嘉と申します。今は伝統産業青年会の中で色紙、短冊の青年会から出向しております、色紙とか短冊とかを作っているメーカーにあります。

鈴木 どうもはじめまして、鈴木と申します。以前はエンジニアをやっております、三十九歳の時に脱サラで陶器を作り始めたわけです。実にまだほんの駆け出しなんです。それで一面、今ちょうど三年ほどになるんですが、哲学の道の方で小さな工芸の店をやっているんです。

松原 山科のほうで呉服製造をやっております。去年の八月から製造にあたって、それまでは普通の悉皆屋的なものをしていましたけども、いろんな分野からの情報を集めてきて、新しいものをつくるう的なことで動き始めたんです。

松本 松原君と同じように呉服のメーカーで彼とコンビを組んで今商品企画をやっています。

逆井 逆井宏です。本職はインダストリアル・デザイナーです。

片桐 片桐嘉正です。谷口さんの説明の「ものづくりから、ものひろめへ」という、それと座り仕事というところでこちらの方へちょっと急遽変更させていただきました。

岩崎 私は京都市役所のほうで経済局の伝統産業課という、余所にあまりない課にあります。

柴田 実は伝青とは非常に深い関わりがありまして、京都信用金庫の地下に事務局があった時代から知っております。

藤本 密室の伝統産業から全かけ離れた、それも洋服のほうの仕事です。

谷口秀 一番最後になりましたけど、伝統産業青年会の副会長をやっている谷口です。陶磁器、卸のほうになります。ですから今現在は職人さんに品もんをつくっていただいている立場です。以前は私もつくってたんですけど、現在はつくらず、見本づくり、指示するほうにまわってしまってます。

ただ、今日この三番目、「ものづくりから、ものひろめへ」という形ですけれども、これにとらわれんと、ただ単にフリーディスカッションみたいな形で、なんしろ先程も言うたように、普段座り仕事の人たちが伝青自体七百人からいるんですけども、大半の人が座り仕事の人たちばかりなんです。情報がものすごく偏っているんじゃないかなと思います。そこらへんをもうちょっとなんかこう、アイディアというんですかね、つまりいろんな意見が伝青自体から出てくるべきなんですけどね。

鈴木 今四十ぐらいのものづくりの人っていうのは、私のところでも今十数名、仕事をしてもらっていますが、その人たちの年齢がだいたい四十前後というところが非常に多いんですが、そういった方々ってのは今生活が大変だっているがあるんですね、ひとつは。特に伝統工芸の場合、もちろんお父さんの代、お祖父さんの代からなすっている方で相当資産をお持ちの方はいいんですけど、新しく始めた人ってたくさんいるわけなんです。そういう人たち、今の四十代ってのは大変なんです、ともかく。食べていくのに



ともかく精一杯。むしろそこへいっちゃってるんですね。なーんにも考える手がないというのがどうも実情のようなわけ。

片桐 まあ基本的にはやはり十二、三年、これは着物業界ですね、着物の図案の場合なんですけども、やはり十年から十二、三年の修業を経て独立という形になりますんで、独立した時点でもう三十二、三から五、六、そういう業界なんです、まあ先程、私年くうて四十四歳で言いましたけども、私たちの年ではまだ厳然と青年部なんですわ。

谷口秀 今片桐さんから言われたように、提案になるかどうかわかりませんが、私自身いろいろな公募展やらなんやかや関ってた時なんか、工芸全般が生活空間の中で点でしかないのが多いんです。点からせて面、もう立体までもっていけへんかな。いつも工芸言われると、この品物はいいですね、だけど一点豪華主義で、その付随する生活空間というのが何もないと。

鈴木 今、店でね、時々私も一日店へ売り屋さんに出るんですけど、昨日も一日出とったんですけど、何が売れるかとか、お客さんが何をほしがっているかという、単なる物じゃないですわね。一年前と較べて今年というのはね、ざっと私の店で今三倍ぐらいの売上あげてるんです。それはある時、考え方すっかり変えましたがからなんです。はじめはコーヒーギャラリーしてたんです。きれいにディスプレイしたわけです。どなたが見てもわかりやすい商品がある。どれもこれもきれいですよ、という形をしたわけです。お客さん入ってこないです。まったく売れない。で、すっかり店

変えまして、若い女の子にディスプレイ思い切ってやらしてみたわけです。そしたらお客さんがとりあえず入ってきてくれるわけです。で、ともかく金工のブローチやなんかでも今まではそれが作品風に並べてあったのを、もうごちゃまぜにしまして、染めも織りももう陶器も何もかも一緒にしちゃって、パーと自分の住まいのような感覚のディスプレイに全部変えちゃったんです。そしたらお客さんどんどん入ってきて、どんどん売れていくわけです。

谷口主 私思いますに、儲からない、儲からないというふうに言う話なんですけども、確かにその商品がいかに社会に貢献できるか、いかに人のためになっているかによって、その商品にたずさわる人が儲かるか、儲からないかということが決まってくると思うんです。ですから、私の言いたいことは、伝統というのはやはり役に立たないような伝統は、もう消え去ったらええんやと。しかし役に立つような伝統は、日本の心、京都の心を代表するような伝統は、この情報化社会の中で情報の中に乗せて全日本、全世界に広めていきたいというのが私の夢ですの。

鈴木 だから、結局ね、今のお話で、ある程度マセールののつけるような形にならないと宣伝もきかないし、売れないということになります。ある程度マスにのせようと思うと、これは工場生産なのか、工房生産なのか、作家のものなのかという、そのへんの規模の問題。だいたい京都の街っていうのはご承知の通り、ほんと皆さん職人さんばかり集まったような街ですから、少なくと



も工場生産にしかない。そうすると規模としてはやはりどうしても工房生産、スタジオ生産の規模でないといけないじゃないかと思うんです。

藤木 今着物の世界でも大正ロマンというね。

鈴木 ええ流行ってますわね。

藤木 つまり、あれは昔のお女郎の着物ですわね。あの着物がものすごい脚光浴びてますけどね、僕は全然着物には関係ないんですけれど。ひとつもいと思わないんです。

鈴木 ただ、どうなんでしょうかね。例えば若い女の人の持つてるお金っていうのを考えますとね、やっぱりいわゆる呉服っていうのは買えないんですよ。やっぱりニュー着物でないと無理なんですね。これは、ポリエステルで一セット揃えて十五万から二十万も出せば全部そろっちゃう。そうするともうだいたい洋服感覚で、プレタポルテとして買える。

京都は日本である

谷口秀 また視点が違うかもしれませんがね。今まで京都自体が百の売上があったら、京都の生産額っていうのはなんぼあるのか知りませんが、トータルしたら、その中で京都としての宣伝費を使うてるのか、ものすごい疑問を感じているんですよ。

藤木 京都市は本当の伝統、伝承も含めてね、伝統産業を守っていくとうするというような、ものすごい積極的なもんあるんですか？

岩崎 その点は尺度の問題ではと思うんです。我ががする場合については直接個々の企業の方のお

手伝いするのはやりにくいんですね。一企業に行政が予算を投下するというのは、どうしても業界といえますか、団体の話になりますんで、それと先程明日お金になるものでないと、というような意見が出とったんですけれど、どうもそういうものはやりにくい。正直申してやりにくいんです。一年後、二年後、場合によっては十年後というような射程で考えます。

鈴木 いや、私ね、その点で行政に伝統産業でもなんでもそうですけどね、文化でも。僕は行政にオンブされないと育っていかないようなものは減びていくと思いますね。そんなの意味ないです、はっきり言って。行政がなんか噛んでくれないきゃできないっていうのはほんとの甘えだと思っていますね、これは。そんなものは減びた方がいいと思います。

藤木 だけど、現在残っているものは、行政じゃなくても、なんらかの応援がなくてできませんよね。

鈴木 いや、僕はそんなことないと思う。だってね、まあ確かに為政者がある時京都の街つてのをつくったかもしれないけれど、やっぱりね、地盤を支えてきてるのはね、毎日のそこに住んでる人たちの生活が支えているんですよ。行政が支えてんじゃないですね。道づけはしたかもしれませんが、確かに、ある時期ね。だけど今の時代はね、もうそれも極端に言うたら飛び越してしまうぐらいつくりに手が迫力がなかったらね、そういうものは残らないと思うんです。

谷口主 鈴木さんのおっしゃるのは、まずやはり

売れる必要があるということをおっしゃるわけで、藤木さんがおっしゃるのは、いや、それだけでは寂しいと。そうじゃないとやはり伝統というものをなんか残しておきたいということだと思っただけです。それはやはりどちらも大事なことだと思っただけです。それだけでも、そこで、伝統というのはいかにいうことになってくると思っただけです。例えば今売れるもんが京都でつくれると。例えばこれが同じものが韓国や台湾でできたらええやないかと。それ売れたらええやないかという、なんかそれでは寂しいということになると思っただけです。それしたら、どういうふうなのを伝統として残していくかということになりますと、さっきも言いましたように、やはり日本人の心だと思っただけです。ところが、その日本人の心とか、日本人としての誇りとかいうことになってきますと、非常に政治的な匂いがしてきましてですね、やっぱり市とか府とか言いますと、なかなかそういうことができないというふうに思っただけです。ですから、その京都の伝統産業にたずさわっている人たちからそういう声でいいですかね、そういうふうなものが起こってきて行政を動かすというような形になるのが本物だと思います。そうするとやはり日本の建前から遡ってですね、ずっとどうして日本人がこのようなしてあるのかというようなことをやっばり見直してやっばり必要があると思っただけです。

柴田 ちょっと違う話ですけど。儲からない話でつまらんっていう感じなんです。ちょっと外してですね、別の話しますけれども。ヤマハという会社の仕事、僕ら三十年来やっています。音楽

教室をつくって楽器を買わせる。いわばプレマリーケッティングといいますが、要するに買う人をまず育てて、それから刈り取るという、耕すという部分が先行した非常に顕著な例だと思っただけです。

現在どうなっているかといいますと、もう人口が減って、子供がいなくなっちゃって、もう横這いになってるだけですが、だけど、そういうシステムとしては非常に有効な投資であり、有効な文化の育成という形で実ってる。ですから、今テレビに出てくるタレントっていうのは、ヤマハのフェスティバルから出てきたのが非常に多いですね。

これは、もうほとんど宝塚ですよ。ですからプロダクションが育ててるよりもはるかにいいものがタレントに出てくる。それで京都というより、京都は日本であるというふうには言うて歩いてるんですけども、僕は『物論』の前になんで『事論』を言ってるかという、やっぱりね、華道とかね、茶道とかね、それから能楽とか、そういうソフト、そういったパフォーマンスというものが存在してはじめてそれに必要な道具がついてくる。

鈴木 なんかむしろね、最近私とて、風呂がつぶれちゃったもんですから、また木の風呂探したんです。普通のなんですか、樫のね。ところがガス屋さんね、工事屋さんですか、電話してもね、ないって言うんですよ。カタログにちゃんと載ってるじゃないかって言ってもね、あれじゃまくさいんです。一台だけでは。こんなもん値段が高いのに、早くつぶれるからやめなさいの、ポリバスにしなさいの、ステンにしなさいの。ダメだって、絶対木でなきゃいけないんだって言って、そ

の木の風呂を取り寄せるのに一月かかったんです。ぶつぶつ言いながら。ところがね、木のお風呂屋さんは喜んで持ってくるんですよ。なぜかといったら、自分とこのお風呂が売れたって喜んでくるでしょう。ところが中間業者がね、扱わないんです。マージン少ない、手間かかって、あんまり利益あがらない、ポリバスなら一日でパーと誰でも行ける。そういうところあるんですね。そのほうが確かに、ああ矛盾してるなって思いましたですね。ですから、やっぱりそういうところにこだわって、例えば今の例じゃないけれども、皆が内需拡大につながりますので、大いにこだわってもらいたいですね。

柴田 日本中があって、京都だけないって感じる(笑)。だから比較しないと物って見えないんでね。鰻頭だってこうやって並べるから大きさがわかるんでね。一個の餅いくら見ても、だんだんカビが生えてきたとこういうことになる。

逆井 京都の人がね、すぐ情報の発信が下手だっていうのはつくづく思いますね。それは例えばね、西武電車っていうのが池袋から、あるいは新宿から出てますね。あれで中吊広告なんかに出てくる地蔵さまが埼玉県の奥のほうにあるわけですね。それでせいぜい三つぐらいこう並んでいてというのをね、京都から見れば誇大広告ですよ。それをね、さもファンタスティックに、いかにも行きたくなるようにちゃんと情報として提供できるわけですね。三つぐらいの地蔵さん、京都ならそのへんにちよっとあって、いくらでも見られるわけですね。それが東京での情報の発信の仕方なん

ですね。

柴田 それで祇園町の商店街の連中が言ってるけど、四条がアーケードつけるって言って焦ってるのか、全然焦ってない。むしろ今もうちょっと売り惜しみしたほうがいいんじゃないかと。お茶屋さんっていうのはもう一生とにかく入らせてもらえないっていう(笑) ミステリーがあるほうが売れると。だからね、売り惜しむっていうのがあるんですよ。売ろう、売ろうとすると、自分で穴を掘りはじめてね。だから売り惜しむっていうことは何をしたらいいかというと、いわゆる伝統産業ブーム、オイルショックの後に輪島が立ち直った時に、なんであんなに受注がきたか。

これはね、不良在庫にならないものというのは流通でもね、ストックできたからなんです。

着物でデイスコ

松原 話は変わりますが、僕も島根県からこっちのほうに来たもんですから、夢、伝統産業しにきたわけです。友禅をしに。それで実際に会社に入ってみると、それが僕は手でやっとなるような仕事かなと思ったら、実際には機械も使ってる。それとか、材料も木とか紙であったものがビニールとか、そういう新しいものに変わってきている。僕は最初にそれでショックを受けました。今は営業の仕事にたずさわっているわけですけども、で、営業ばっかしとちがって、職人の夢を捨てないようにして、実際に自分でも職人と同じようなことをして現在もやっとなるわけですけどね。で、確かにいいものをつくりたい。自己満足のものもつくって



ます、実際に。だけでも、結局さっき出たような話で、誰が認めてくれるかいというところですね。消費者のためにつくっとるけども、実際にはそれまでの流通段階のところで評価されてしまっ、次に渡らない。

松本 ずっと皆さんのお話聞かせてもらって、感じてたのは、僕よりも経験豊かな方々だし、一番思ったのは、皆正論だと。その通りだなと思って、じゃなんで皆問題抱えてんだろうなと。そこまでわかってるんだったら、なんで今こんなに苦しんでるんだらう(笑)。

それにね、「関西学生着物振興会」という団体がありましてね、学生ばかりが集まって着物を売ってるわけなんですよね。よくスキーツアーだとか、そういうプランを立ててアルバイトのかわりにやってる連中がいますけど、それが今度は着物を売ろうと。なんでかといったら、その代表者とちょっとだけ喋ったことがあるんです。あんなに着物の売り方が下手だと。学生のアルバイトのほうがずっとうまいよ。何やってるかというと、例えばデイスコを借り切って、そこでデイスコの着物パーティをやるんですね。着物を着てきなさいと、なかったら貸してやります。着物窮屈だというと、デイスコでも踊れますよと。そういう発想っていうのは僕ら最初聞いた時には、僕なんかはやられた!と思ったわけですね。うちのえらいさんとかに言わすとバカじゃないかというわけです。でも、そのバカなことが実際あっているんですよ。

面白いのは、僕はそれとは全然関係なくて、室

町の問屋筋、メーカー筋の若手ばかりである団体つくってんですけども、その着物を、関西学生着物振興会がやる二年ほど前にデイスコパーティをやろうと、着物を着て、一回そういうことをやってみよう。その業界筋だけに声かけたんですがね、誰も来ないんです。で、結局皆洋服で来ちゃったわけなんです。ところが、関西学生着物振興会は素人というか、一般に声かけたんですね。皆来るんですよ。業界で着物を本当は売らなきゃいけない、振興させなきゃいけない連中に声かけたら、皆いやだ、いやだって逃げちゃった。そういう人間が集まって着物を広めようといったって、これは無理だなんて痛感しましたね。

谷口秀 話としてはまとまりなく、私自身もまとめる能力もなかったんで、すみませんけれども、また続き、また食事でもしながらいろいろとお喋りいただいたらと思いますので、今日はありがとうございました。

●出席者(発言順)

- 谷口主嘉 (伝 青)
- 鈴木宗敬 (一 般)
- 松原義美 (一 般)
- 松本 良 (一 般)
- 逆井 宏 (一 般)
- 片桐嘉正 (日 図)
- 岩崎 猛 (京都市伝統産業課)
- 柴田 献一 (K D A)
- 藤木武久 (日 図)
- 谷口秀二 (伝 青)

工芸情報 は 国際メディア

情報は有料
安物買いはソン
ましてタダなどと
情報加工術
情報DCブランド店
理科系文化生活法

情報はタダか

本郷 実際、この建都千二百年というのは、京都に、平安の都になってから千二百年になるということはわかっているんですけどね、それに向かって一体何をどういうふうにしていくのかというようなことは、なかなかよくわからないということがあろうかと思っています。そこでこの二時間半を「情報」の分野と、それから「国際化」という、この二つに分けて進めていきたいと思います。前半の情報につきましては、小川さんに担当していただきまして、後半には黒竹さんに担当していただきまして国際化の問題について進めていきたいと思います。

小川 今日、全分野に情報という言葉が入っていますけれども、やはり百年、二百年前のことを考えてみましたら、京都が都であったということとともに、各分野の方々が京都にどんどん入ってきた。同時にまた技術も入ってきたという、そういう技術交流があったということですね。それから人的な交流があったということ。ところが現在はそういうようなことが行われなくなって、東京に中心がいったきりというふうなことになってきたんですね。やはり情報というのは人間が行き来するところにまず生まれてくるのではないかと思うんですがね。柏木さん、如何ですか。

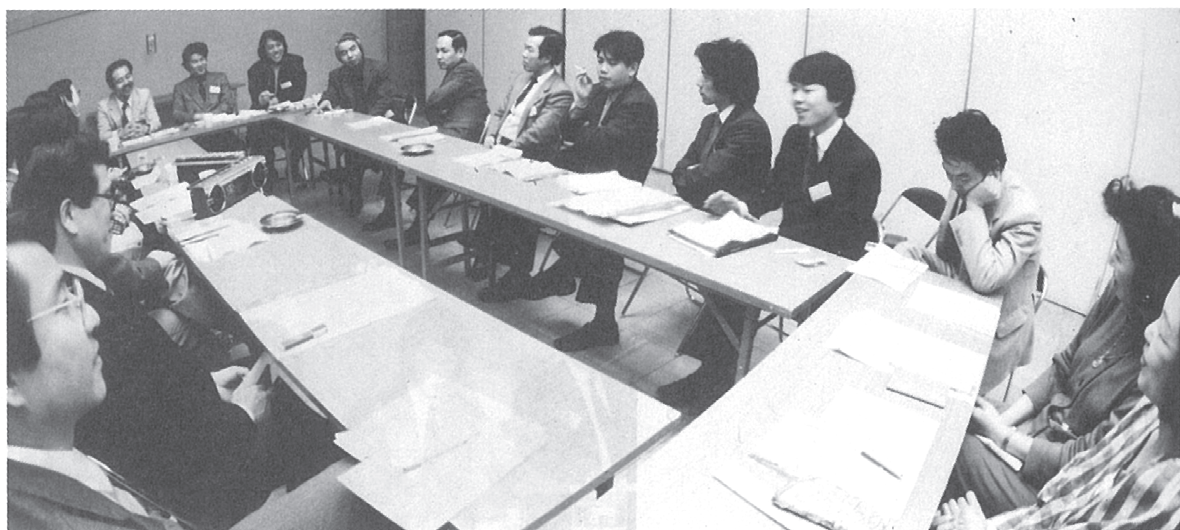
柏木 どこへ行っても一番先に喋らせてもらうんですけれども、なんか開発、開発言うて、急に最近、開発言うたら私の名前が挙がってきたり、ちょっと京都新聞に載ったのと、KISに発表したのと

がごっちゃになって、皆さん同じように思われているんですけど、まあどっちにしても、たいしたことないんです。たいしたことないんです。要するに基本ニーズというのは前からあったもので、それに対して、出会ったのか、出会わなかったか、同じ出会っても情報を取り逃がしたかどうかの違いだけやないかと思ってます。

松本 仕事関連ではないんですけども、情報という場合、特にどう伝えていくかということで、いろいろ考えたりするわけですけども、京都のコミュニケーションシステムというのは、流通の仕方がかなり口コミ的であったり、まあ人との出会いの中で生まれてくると。そういうのがかなり重要なウェイトを占めているというのがありますけども、逆にマスのイメージであるとか、そういう全国的な規模のイメージであるとか、情報というのは東京方面に集中している。まあ京都は多分情報がなくっても、全国的な情報の中で充分暮らせてしまうという、そういうギャップはありますね。

小川 とにかく、消費者をあまり意識しないというか、そんなこと言うたらいかんのですけど、今度は当然、使い方わかって当然とか、ね。これがいいと思われて当然やとか、そのようななんかくり手だけの側からのものづくりというのが、長年京都ではあるようです。

東田 私も一年間ほど工房をスタッフに任せて、できるだけ世の中を見てみようというので、一年ばかりまあいりすると、東京はじめ各地へ、イタリア・ミラノまで行ってあったんです。そういう



形で一年間うろろしながら出た結果、染め屋の人間であろうとも少し世に出るべきだろうと、表に出てもいいんじゃないかと思ひ始めてます。

二位 私が今、知りたいなと思うのは、女性の方がなぜ着物を買うのか。確かに美しくなると、またそれを着ると気持ちはどうとか、その心をどのように着物の中に入れていくのか。その着物はこういう形でつくりましたよ、ということがはつきりすれば、女性の方はそれを買われる、心を満足さすために着物という物によって心を得る。それにはやはり時代の流れの中の、ちょっと新しいものをどう表現して、入れていくかということが今大切なんじゃないか。そのへんが非常につかみにくいんです。

大村 今、情報というお話なんで、実はこの間もK I Sのパネルディスカッションでちょっと提案してたんですけどね。東京に情報が集中するっていう意味で、京都あたりの情報が少ないと。私も東京にささやかな事務所があって、二十年ほど東京でやっているわけなんですけど、東京は情報に対する報酬でいいですかね、支払いが非常に明確に出てくる。京都の場合、今も、えらい反論するようですけど、親切であつたりとか、自分が話すからお前も話せと。いわゆる非常に無料のお話がね、情報の。それが随所にあるんじゃないか。

小川 難しい話ですけどね。我々まだ本当にやり出したところなんですけれども。やはり京都が、まあ言えば王城の地であつたという。イコール大生産地であり、大消費地であつたという。やはり全国から、今の東京と一緒にすよね。商売にくる。

そしてまた都を見学にくる。その時に京都のもの、京物というものを買って帰る。その時にいろんな方々が情報を落として帰ったと思うんですね。

今までだったら、都会人だからとか、いいもんつくってんだからとか、まだ京都は王城の地やなんて思うてる人もありますし、人によっては天皇をこっちへもう一回もって帰ってほしいなんていう人もありますし。未だになんか昔のそういううな、もう以前から二代も三代もこっちへきとるわけですからね。我々も孫、曾孫になつとるわけですから、もうぼちぼち昔の京都人をやめてしまうてですね。一旗あげようと思うて、東京なり大阪なりへ、また外国へ行くというふうなことをやらないと。それでまた京都に情報が集まってくるんじゃないかな。

柴田 いろいろ伺つてまして、やっぱり一番気になるというんですか、私も京都で生まれたわけやないもんですから、一番感じますのは、情報の受け方というのものはものすごく上手だと思うんですね。そういう受け方とその加工というのは非常に上手だけれども、日本全国、あるいは全世界への発信が非常に弱いと。

林 例えば情報というのは形がない。形がなくても、言葉で非常に重要なことを文章にするというようなことがありますね。デザインとか含めまされども、例えばデザインだけという分野があるんです。私の仕事の中にペーパーデザインという、デザインだけを売るといふ仕事もあるわけです。ところが、京都の場合、その物は売れるんですね。物はこれいくらですという値段がついて売れるん



ですけどね。そのアイデアとか、そういうデザインを協力してくれというような言い方をするわけですね。

山本 今おっしゃったことはごもっともだと思うんですけども、最終的に根底には京都には先程の王城のあれじゃないですけども、もともと物真似の文化といった、模倣の歴史みたいなのがずっと根底にあるんですね。それはもう日本の習性的、日本の文化そのものが模倣の文化ですね。確かに私らの着物の世界でもそれに似たようなことが何回もありますけれども、ちょっとでもロイヤリティーを取るとなれば、もう模倣がすぐ出てしまっ、払ったところがバカをみるような、そんな文化構成みたいながあるんですね。

小川 なかなか難しいところに入ってきてますが、僕は先程のデザイン権だとか、そういうようなものに金を出さないというところで、一番いい例が行政が金を出さないんですね、そういうものに関して。

東田 いや、あのね、ちょっと着物の業界の一つの変わり方というのをみますとね、今年ぐらいからかなり変わりつつあります。林さんはじめ他の方々がおっしゃっているように、今まで着物の世界というのは旦那衆が仕切っていた。その当時はデザイン料、あるいは考案料いうものはほとんどなかったんです。それは、京都の旦那さんというのはものすごく文化レベルが高くて、自分でこなすことができた。ところが昨今の旦那衆は余裕がなくなってきましたから、だんだんと世代交替の間に文化というものを、オーナーから発信するこ

とができなくなっちゃった。

受信装置・京都

本郷 ちょっと時間が過ぎてまいりますので、黒竹さんから、国際化という問題に入って頂きたいと思います。これは国際化と情報化というのは切り離せませんから、今までの続きの話で結構だと思います。

黒竹 国際化というのは、現在私自身が感じるところでは、先程、記念講演でも木下理事長がおっしゃっていたように、何かをつくっていかなくてはならないというようなことを含めて、それと千二百年に対して京都をどうするかに関わってくると思っています。要するに国際化というのは、どう、世界各国に日本のよさを表現するかということだと思っんですね。そういったことを含めて、今京都をどういうふうに活性化さすかというふうなことを、これから後半考えていきたいと思っています。

木幡 京都の国際化ということなんですけれど、工芸的なこともそうだと思うんですけど、宗教的なことからかけ離れては京都は語れないということが特にいわれると思うんですね。そのへんを含めて考えたい。

角田 どっぷり着物の業界にいますので、国際どころか、京都も出られへんような状態なんですけどね。うちの社長の知り合いのところにホームステイに来ていたオーストラリアの女子学生がうちのアトリエを見たいて来たんですよ。その時にたまたましてた仕事というのが、問屋に頼まれてつくった袖見本というのを五、六点並べてつけてたわけ



ですわ。それをものすごくええて言うわけですね。うちらなんか、それを溜めといてもどうしようもないから、もうある程度溜まったら捨てるようなもんですけれども、それがほしいて言うから、何にするんですかと言うたら、なんか壁に貼りますいうことで、ああこんなんがええのかと思ったやつが、実は問屋にはねられたやつなんですわ。

中谷 京都というのは、今の皆さんの意見を聞いていたら、やはりまだ未熟児的な成長をしているんじゃないかなと思います。京都は、職人というんですかね、作家と企業というのが両立していて、最初工芸品というのは、これは王侯貴族の一つの贅沢品みたいなものからスタートしたんだと思うんですけども、それがひとつの産業という形の中で出てくることによって、やっぱりその作家と商売するものとのつながりというのが出てくる。だから、京都の国際化という一つのテーマの中でも、やはり京都人はこの「京都」というイメージを変えたくないという意識、これが非常にマイナスしている。その中で、むしろ京都の活性化というのは、脱京都みたいなものを図ることによって、国際化も図れるんじゃないかと思えるんです。

山本 ちょっと、いいですか。意見をお聞きしてまして、確かにそういう見方も多々あると思うんですね。ただ、私、個人的なことで恐縮なんですけれども。去年、一昨年とスイス、それからドイツは二度ほど前に展覧会に行きました。スイスはローザンヌという小さな都市、そこで国際ビエンナーレというのをやる、織物の展覧会をやっているわけですね。この小さな都市で、それが一応世界

中から、日本からもたくさんの方が出品してまして、もっと大きな街かと思ってました。しかも工場街のなかなんかで展覧会をする。それからドイツのほうのハイデルベルグというのは、去年は六百年祭というので、そこでも日本展というのをやってましてね。この都市も、そんなに大きくない。それから八月にカッセルというところへ行きましたけど、そこも京都よりずっと小さい。その街がそれぞれに特色のあるやっぱりいろんなイベントをやっているわけですね。そんだけの会議場、そういう建物、器というのは立派なものがあるわけですね。古城があり、それからそういう展覧会の会場がありという形で、そういうところを見てましたら、京都のこれからの方向も見えるような気がするんです。

黒竹 今、山本さんのお話で、やはり小さい街ていうのは割にそういう結束力というか、それができているんですね。この間も、倉敷で第一回音楽祭というのをやりになって、それは一週間連続でやる。これは倉敷のあいう倉というか、漆喰の壁の町並みで、その店先でミニコンサートというか、まあタンゴをやる人とか、いろんな人が集まっている。中心にアイビー・スクエアというのがあって、そこで一つのイベントを展開するといふふうな形で、割にいろんな地域から人が集まってきましたし、そのことによっていろんな情報とか、また人が集まった。そこにまた経済というか、ホテルは賑わうし、近くのレストランとか食堂も相当な賑わいなんですわ。やはりそういったことが一つの経済の活性化なんだと思うんです。

「京都国」から

松本俳 私が生け花のほうを致しておるんですけども、本部が東京にあります関係で、京都からということよりも、東京から国際性ということをよく耳にしているんです。特に草月流といいますのは、どちらかというと国内よりも海外での活躍というのがありまして、海外の方との交流がございます。それから去年でしたか、宝ヶ池の国際会議場で「生け花インターナショナル」という会がありまして、もちろんその時には全国のお家元が集まられて作品を発表するという形だったんです。黒竹 生け花というのは、あれはスタイルとか、それはやはり日本独特のものなんですか？松本俳 まあそうですね。特に池坊さんは一番古くて、四百年も五百年もという歴史をもっているし、その時代からというものはやっぱり日本独自のものです。

それから京都自体で言いますと、京都の欠点というのが特に目立つようにお聞きしてたんですけども、特に親切かどうかということが問題になりますと、女性はすごく京都の女性という女らしくて、しとやかで、ということになるかと思うんですけれども、実際面はやっぱり表面と中身とは全然違うように思うんですね。だから、親切かと言われると、結構イケズやしな、ということもあるようです。

野々村 私は柏木工芸というところで、着物の伝統的な型友禅というもの、型紙の製作の一部で、写真製版というスクリーンを製造する技術を約十

年近く、技術屋としてやってきたんですが、その技術のある程度習得しますと、なんか自分として物足りない。このままこの技術だけで終わるのは面白くないという気持ちがあったんです。そこで、東京のある科学メーカーの企画室とか、あるいは大阪とか、それから名古屋とか、そういうところの科学情報を収集していった中で工芸に生かせるものをセレクトしていったって、何かドッキングして新しいものができないかというような形でものづくりに参画してきました。それまで私はほんまに暗室の中でうずくまっていた。それが例えば東京とか大阪へ行かしてもらって、いろんな人がいろんな見方で京都を見てくれている。そしたら今度はアメリカの人はどんなんだろう、ヨーロッパの人はどんなんだろうという、そういうどんどん意欲が出てきまして、そこに私にとって一番必要な国際化は何かというところ、殻を捨てるといって感じ、これがなかったら、外へは出ていけないという気持ちをもってます。

本郷 京都生まれで、京都市以外の人？ 半分以上ですね。その人たちがご覧になった京都というのはどんなものでしょう？

柏木 私、岡山から出て来たんですが、京都が公家さんの街だと。ああいいこと言うなと思って、今聞かせてもらって、そのうちに滅びるなという（笑）、そういう感じはします。確かにね、今までずっと語られてのと同じことですけど、皆すばらしいもの持ってますし、京都に文化ありますけど、そうしたらそれをどないしようと。それで京都どないしようと、皆ぎょうさん京都の文化人が



集まって話したって、なんにもならへん。毎年なんにもない話をずっと七回目です、やったはります。そういうで、金出しとない人間ばかりですよ。今ソフト部門に対して、やっぱりお金出したがらないといいますが、形がでなかったら金出さない。

大村 それと外人がいなのは不思議やね。これ、こんだけ「国際」というタイトル打って。

小川 今ずっと聞いていて、このデザイン会議でもそうなんですけど、京都の人にしても、日本人にしても、自信がないのね。それで京都は、自分からなんかやろうということをしんわけです。

ある面ではさっきも出てましたけど、都会というのはそうやと思うんですね。なにも東京でやっているのは、東京の人が東京でやってるのやないねんから。田舎の人が東京へ来て、そして一旗あげようと思うてやっとなるわけです。

黒竹 それに国際性をもたすためにも、ヨーロッパの場合は地理的に割に隣接しているわけなんです。だから国際的なイベントをやってもかなり集まるんですが、日本でやるとなったら、ほんま交通費だけでも大変。

それともう一つは、仮に、ヨーロッパの隣接した国々というようなものの考え方からしますと、京都という国がある、それから大阪とか神戸とか、あるいは東京というふうな、そこからやっぱり人が集まってインターナショナルというような角度で考えていったらどうかと思ひます。

本郷 大変混乱したようで、申し訳ございません。皆さん言い足りなかったことたくさんあると思ひ

ます。それはそれで、また次回に、今度は声を大にして思う存分言っていたき、いずれにしましても、建都千二百年というタイトルですとやっておりますけれども、放っておいても千二百年がやってまいります。このやってきた時に、やっぱり今日よりも明日と、だんだんとよくなるという形にならなければ。京都の町そのものがやっぱり日本の中で輝いてなきやならない。京都の町というものが、あるいは京都の人間、京都で仕事をする人、そこに住んでる人たちがやっぱり明日に夢と希望をもって向かっていけるように少なくとも、デザイナーばかりじゃないでしようけれども、今のお話のように自分に関わっていることに最大限努力するということをしていきたいなと思ひます。長時間にわたり、ありがとうございました。

●出席者（発言順）

本郷大田子 (KIS)	中谷浩志 (ICC)
小川裕起夫 (ICC)	松本俳沙 (ICC)
柏木 桂 (KIS)	野々村道信 (KIS)
松本静明 (一般)	新宮克美 (ICC)
東田崇資 (一般)	大誠寺陽子 (一般)
二位良一 (KDA)	岸本康志 (KIS)
大村俊夫 (KIS)	
柴田 裕 (KDA)	
林 暁子 (ICC)	
山本唯与志 (KDA)	
黒竹節人 (ICC)	
木幡光三郎 (ICC)	
角田 康 (KIS)	

景観都市の色彩を
考える

色々あつて
色々考えて
色物 色好み 色変化
朱の誘惑 朱の刺激
朱の永遠
ノスタルジック
都市ウエア

歴史が生む色

山本 景観都市の色彩を考えると、色というのは非常に範囲が広いと思います。けどもう少し町並みの色とか自然とか、そのへんの色を具体的に身近なところから絞り込んで、別に結論は出なくてもいいと思います。それで、それぞれの分野から自由に話し合っていたきたいと思っています。

尾崎 景観都市というのは非常に大きい問題やと思うんですね。例えば、電車にしてもバスにしても、やはり特に京都の場合は、古いというイメージがございまして、佗、寂という言葉がございまして、でも、やはりこれから新しいもんつくるにはどうしても新しい色というものもこれから考えていきたいと思うんです。それが従来の景観といかにマッチするかということが重要なんではないかと思ひます。

藤田 僕はグラフィック・デザインですが、どうしても見方が感覚的というか、景観都市をビジュアルに見ています。

やはり京都の佇まいというのは、やっぱり色と
いうことになれば、灰色、また銀ねずみ色とか、
いぶし銀かと、このイメージはやはり瓦、京の町
並みに綿々と続いている屋根瓦から生まれてくる
と思います。それをなんか、すっきりした言葉で
言えば、**“利休ねずみ”**という色名ですね。それ
に利休ねずみと共に代表的な色というのはやっぱ
り朱、赤ではないかと思えます。

柴田 自然には三つの色があって、その土地の色、

風景、そして風土ですね。それがその土地の景を生み出している。この色彩というものを、女性の目から見て考えたいと思います。もっと身近なところで、色というものを考えますと、目立たせない色と、目立たせた色というものがあると思います。その中で目立たせたくない色で目につくものにゴミ袋がありますね。男性方はそういったことにうといと思いますが、本当に台所から出るゴミの処理は大切なんです、このゴミ袋のカラーというものは全国どこへ行っても一緒で、京都の町並みに全然合っていない。それで、女性ばかりで、そういったものを、ゴミ袋の色から考えてみましょうというグループをつくって、少しづつやっているんですけど、なかなか皆さんに通じないので、是非今日はそういうことを考えていただきたく思っていました。

大橋 大橋といいます。私は平安建都千二百年記念協会の事務長をしていますけども、実を言いますと、京都市からここへ出ておりまして、十年ちょっと前になりましたけれども、京都市で初代の景観管理長をやってまして、京都のこういう景観を守ろうという責任者であったんです。実際、京都の景観を守るという場合に、やっぱり大きな問題は色だったんですね。で、それは実際問題、建物のデザインとか、いろいろな事がございます。

でも詰るところはどういう色にしていこうかというところで、今久谷さんがおっしゃったんですけれども、フランスなんかでは、まあ極端な場合、室内のカーテンの色まで決まっている、パリのある一角では。政府も二十年前に初めてそういうこと



に手をつけてやりかけたんですけども、やはり色を決めるというところまでいかなかったですね。それはやっぱり非常に難しい問題で、まさに色なんでものは、今までいろいろお話がありましたけど、やっぱり相対的なもので、例えば、赤が派手だと言っても、今おっしゃったように、平安神宮の大鳥居なんかは、ああいう緑をバックにした中で見ますものすごく映えるわけですね。だから、なんか派手な色は駄目だというふうな決め方もできないんです。

山本 先程から聞いていると、具体的な色がいろいろ出てますけど、それよりもまず京都がバランスのよい景観都市になっているのかどうかですね。つまり、やっぱり百万人以上の人が住んでいるという事実が片っぱにあるわけです。飛騨の高山とか、一万、二万のそこやったらね、そのまま保存してそのままいけると思うんですけど、百万人以上の人が住んでる。そしたらどういふふうにしたらいいかということ、まあ、一つのストリートを一つの統一した色でまとめると、で、洛西ニュータウンなら洛西ニュータウンでまとめると、で、河原町とかああいう繁華街は繁華街で考えて、最終的にそれがいろんな色が入ってるけど、なんか統一した渋味があるとかね、なんかそういうふうにもっていかないと、大都市における色彩の計画というのは、無理だと思うんです。

真鍋 今ずっと皆さんにご意見聞かせていただいて、いくつかが非常に鮮明に浮かびあがっていると、思うんですけども。都市の色彩っていうのは、割と歴史的な経過とかね、それから住んでる人間

たちのなんとかなしのコンセンサスとかいうものと非常に関係があるんですね。だから、誰かが非常に強権的にこれがいいというふうに決められないという性質のもんだということが一つ。それと、確かにバリなんかの場合には、町並みに対して何重にもガードがあって、そして一番最後のところが自分のものだとかいうか。そうすると、内装にしても変えようとする、ほんとに非常にたくさんの手続きを踏まないと変えさせてもらえないというふうな、そういうシステムができて。ところが、そのシステムは決して突如として出来たものじゃなくて、もうかなり、いわゆる都市生活者の歴史に見合った期間、いろんなトラブルを起こしながら、ああでもない、こうでもない、やっぱり百年とか、あるいはそれ以上の経過の中で出来てきているんですね。

山本 自然の材質を使うということは非常に全部に通じるわけですね。瓦の色にしても、いわゆる土、土塀にしても、自然ですね。自然材質そのものですし、また人工的になんかつくっても、それに近い色、まあ木とか紙とか、石とか土とか、そういうことをベースにすれば、自然にそれは全て中間色になるわけです。それに合う色が、伝統的な色として朱色が合うとか、例えば花見小路の力茶屋のあの朱色がなんともいえない良い朱色なんです。で、それで、非常に私はああいう特殊な、平安神宮とか、祇園の八坂神社のあの塗りたての朱色というのは、背景に緑がなければとてもじゃないが見られないような、極端に赤い色であったり、これは少し色みをもうちょっと考えられ



ないのかなと思う時があるわけですね。まあ時間がたてば、当然それは少しくすんできて、いい朱になるかもわかりませんが、最初の段階、非常に気になる朱であるというふうに考えます。それで、京都は非常にそういう自然に恵まれているところであったんですが、特に都心部はほかの都市と変わらない、もうほとんど変わらないような色彩が氾濫したりしますから、先程からおっしゃっているように、地域ごとに一つのまとまりを考えるべきだと思います。

市民が求める色彩

尾崎 あの一、皆さん非常に話が、非常に具体的であって、具体的でないんですね。景観都市を考える、いざ今度は事を起こそう思うても大変なことがあって、なかなか具体的にはできないんですけれども、やはり京都らしさというのが非常に難しいんじゃないかな。京都らしさ言うても、今までは私らのイメージはわび、さびとか、その利休ねずみとか、そういうイメージがあるわけですね。ですから、やはりこれから我々が議論するのは、新しい京都らしさというのをね、どう考えるべきかということ。私が最初に申ししたのは、まず景観ということ、建物だけとちがって、いわゆる電車とかバスとか、そういうものも入ってくる。

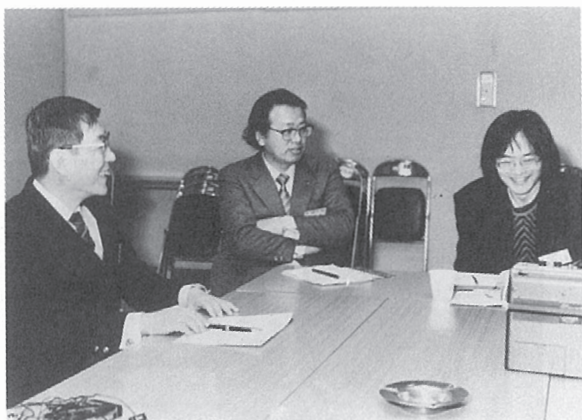
柴田 一つだけとれば、どの色も美しいと思うんですね。周りの環境によって、その色が生きる。ヨーロッパなんかでは、昔、敷石舗装する場合、その土地の石を使った。京都もそうですね。土塀にしても土地の土を使った。そういったものが

調和を生み出したんです。やはり自分の国の自然のものを使う時に、それがやっぱり自然に溶け込んでいく。今日本の場合、日本中どこへ行っても同じ材料、どこへ行っても同じものですね。それが風景を壊していると思うんですね。

山本 京都の市電に使った敷石が、石塀小路で使われていますね。非常に溶け合っていましたね。

真鍋 だから、私は最近よく言うんですけどね、多分、特に京都という町を例にとってみれば、先程バリの例とかいろんな例、出ましたけども、近代の都市の歴史というのが、ヨーロッパは非常に連続的にね、その色で苦労しているというか、色も含めて、意匠的にも苦労しながらね、いろんなトラブルを克服して今日に付てますよね。ところが、そのへんで日本の都市はそういうシステムをうまくつくってこなかったというところがね、非常にあるのではないかと。色で苦労しなかったという言い方はちょっと語弊がありますけどね。

松田 東京という街は高度成長時代に無茶苦茶になったんですね。そのめっちゃめっちゃになったということが、逆にいろんな色を淘汰する力になって働く。非常に面白い現象なんです。で、都市機能というものは、ノスタルジックに追ったら都市の発展というのはないので、こうするべきだ、みたいなことをやってしまうと、よく行く場合と、悪く行く場合と両方あるんですね。これも一つの競争社会ですからね。とにかく自分たちの思うままにやって伸びて来たという歴史がある。これ、たかだかね、日本人がそういう意味で、色の美しさだとか、統一化だとか、いわゆる都市のアイデ



ンティティみたいなものを見失ったのは三十年代以後だろうと思うんですね。昭和三十年代以降。これがね、最近になってね、三十年たってみるとね、意外とそういうことは大切なことなんだというような気持ちが出てきているんですね。ところがその手法として、こういうふうにしたらいのところがいますか、みたいな色彩的な面の提案がね、なかなか出来ないのが今の日本のデザイン界の実情なんですな。

真鍋 それとね、僕はやっぱり、さっき従来の私の言ってる続きになっちゃうんだけれども、パリという街に街意識がね、非常に濃厚に蓄積されているからね、だから、ああいう冒険が可能になったというようなこともね、あるような気がするんですね。あのー、単純にだから、いわゆる新しい全く実験的な空間をつくるということだけでとらえきれない。京都でそういうものをやっていく時に必要なのは、実はその受け皿の部分でいうんだすかね、いわゆる市民的な合意がね、どんなふうにして形成されるかということ抜きにして、やる非常に危険だと。

木村 企業でやられるそういう色彩計画とかね、商品を出される場合に、実際売れなかったら、それはもうなんぼよかって引込めるわけですか。悪かって逆逆に売るといことになりますかね、企業としては。

久谷 だから、僕なんか物を選ぶ場合に色は無視できないですね。だから形がよくても色がね、色さえ良ければ僕ら欲しいものがいっぱいありますよ。

柴田 ですから、企業の言いなりになってるわけですね、私たち。他の色に変えて欲しいと言いにいっても変えてもらえない。いつも与えられるばかりで、ポリバケツの色も私なんかこだわるので、欲しいもの見つからないんです。

山本 よく考えますとこの着物、シルクならシルクという素材に対して、それ本人がですね、それシルク以外では染めないとかね、そういうことを現実に見ているわけです。それがコットンにかかわるとか、なってくると、染め方知らないとか、色が出ませんとかいう声が返ってくるので、びっくりするんですね。それだけ細分化されたジャンルで、なんか専門、そういう着物の色を染めるうえにおいては、もうほんとにエキスパートですけれど、ちょっと素材が変われば、もう同じ繊維でもそういうふうを意識がついてきてないというようなところがあるわけですね。ましてプラスチックとか他の繊維、そういう新しい素材に対しては、恐らく最初から忌避しているんじゃないかね。

真鍋 ちょっと私、今さっき企業と市民のやりとりを聞いていて思ったんですね。僕自身はいつも思ってるんですけれどね。一般的には企業横暴というのがすぐ出やすいですね。市民レベルで議論するとね。だけれども、そういう状態というのは、実際は市民の水準、レベル、到達しているレベルというものが非常によく現れているような気がするんですね。だから、行政なんかそうですね。行政がやってくれることに対しては、非常に批判的な形で論議がされることがあるんだけど、実はよくよくそれを追究していくと、行政自身の問題よ

りは、市民の到達している、その時のね、レベルというか、そういうことがものすごくよく反映しているわけですね。だから、かなりそういう意味では見通しは暗くないといえますかね、お互いによ。言われたように、まさしく企業の側からしても、受けとめていく消費者がどう考えるかということとは非常に重要なファクターですね。

しかしながらどうも我々の市民レベルの水準が上がっていくスピードが、どうも全体の流れからすると、もうちょっと早くならないかなと。その早くするためには、何かいろんなことをやらないといかんのではないかなという気は私自身はするんですけどね。だから、そういう意味でゴミ袋のあのカラー、色の話ですね、非常に面白いなと思ってね、感心したんですけどね。そういう、加速していく一つのファクターとして、やっぱり非常に注目するような要素がありますね。

変化する色、永遠の色

松田 僕は色をつけんでも、良いものはあると思いますね。今カメラがね、これなんかもなんどか、今まで試みてきてね、その都度失敗して、まだ黒なんです。あれでいいですね。あのね、変えなくていいものを、あえて変える必要はない。真鍋 そうですね。とりわけ大きなものになればなるほどね。

今少し、かなり具体的な色論みたいなものがたくさん出てきて、比較的最初の柴田先生の話でいくと、物寄りに論議が進んだと思うんですけどね。ですから、少し事寄りにといいますかね、どうい

うふうにやれば、物寄りの論議から、少し事へ向かって動いていくというか、具体的に都市の景観を少し、なんとか少しでも前進するような方向が見つけ出せるかというようなことをちょっと論議してみたらどうかと思うんですがね。

木村 やっぱりあれちがうかな。この都市はものすごく長い歴史があるわけですけど、十年や二十年ではね、もう変わらないというか、百年ぐらい先のことを考えて、百年か二百年ぐらいのことを考えてやらないと、計画されたパリみたいな街は出来ないと思いますしね。そのぐらいの大きい気持ちでないとかえって、小さいとこばかり見て、そこだけ直してやってるんでは、絶対百年後、二百年後にはもうバラバラのものが出来てくるやろう。もっと大きいスパンでなんかこう……。

大橋 ヨーロッパの場合は、これやっぱり伝統的には石造りの建物ですね。だから、もつ長さがちよっと違うわけですね。だから、外観はそのま位置いて、中を勝手に変えて住めるわけですね。ところがやっぱり木造日本家屋の場合は、どうしてもそういう面で難しいもんがあってね、で、変わらざるを得ない面があるんですね。

それから松田さん、東京では高度成長でぐちゃぐちゃになったということでおっしゃってましたけど、一つだけ規制して遺したところあるんですね。それは皇居前。大阪の御堂筋もそうです。近代的なね、ビルの一つのあり方としては、まあこれから例えば、烏丸通りとか、そういう、先程は「もう勝手に」というような言い方をしましたけど、これまた一つの、つまり流れですよ。市民的な



コンセンサスがそういうところで出てくるなら、烏丸通りみたいところはそういう建物、高さもそろえてやるというふうな方向をね、やっぱりとっていくべきやないかなと思うんですね。

松田 やっぱり自浄作用が出てきますかね。放っておいてもね。ある年月がたったら、あれはやっぱりまずいというようなことで、修正されてきますからね、そう恐れるほどのことではない。例えばね、先程、朱の話が出ましたけど、これ、ハレの場の色なんです。ケの色じゃない。日常性まったく離れた位置であの色を楽しむ、楽しむというか、あの色の影響をうける。

東京で外壁材の色が問題になったことがあるんです。その時にどうして浅草寺のあの朱色に決められたという(笑)指摘をしたんですけどね。あの場所に、浅草のあの一角だから、あれが許されるんであってね、あれと同じ色を他の建築物につけて街の真中にもってきたら大変な論議を呼ぶだろうと。だから、そう神経質になる必要もないという感じがするんですね。

真鍋 だから、今言われたように、確かに変化、むしろ変化を前提としているという風土的なね、日本の建築の場合にはあると思いますんでね。まあせいぜいよくもっても、百年という、もうほとんどどの家はもたないですからね。五十年ぐらいでもう全部駄目になってしまう。

松田 だから、色の永遠性ということなんです。ね。こういう色をつけたら、より長持ちするかですね。これはね、我々の仕事の中に流行色の考え方として大きなウェイトを占めるわけです。これは商売

をやっていて、非常に効率をあげるための作業としてやるわけですが、これはね、流行色の根源は何かというと、視神経の疲労ですね。赤と緑と、それから黄色と紫の四つの視神経細胞が同じ色の刺激を受けて疲れてくるわけです。そうすると、飽きが生まれるというんですね。

山本 話が盛り上がったところで時間になりましたんですが、今日は一般の立場から、あるいは専門家の立場からいろんな意見が具体的に生まれて、それでいわゆる物から事を起こしていくということについては、これは事を起こす前にもっとこれを一般市民レベルで意識改革、まあ地域ぐるみでもいいと思うんですけどね、それから、何か手近なところで、例えばポリ袋の問題も出ましたし、とにかく都市景観は非常に公共的なものであるから、そういう場所にこの色だったらいんじゃないかという一つの具体的な事が起こってくると、連鎖反応して、それがいい一つの状態に変わっていくんじゃないかというふうに考えます。

どうも今日はありがとうございました。

●出席者(発言順)

山本竜一 (KDA)

尾崎 要 (KDA)

藤田頼伯 (KDA)

大橋哲夫 (平安建都千二百年記念協会)

真鍋宗平 (KDA)

柴田富佐子 (一般)

木村紀久雄 (KDA)

久谷政樹 (JAGDA)

松田 豊 (奈良デザイン協会)

京都発・1994年

お東さんに超高層ビル
黄金文化 金 銀 華
掌の中のマチ 街 町
界限 図子 路地
上ル 下ル
東入ル 西入ル
ストリート畳んで迷路

インターナショナル?

尼川 第六分科会を始めさせていただきます。座長とアドバイザーをご紹介致します。先程スピーチしていただきました地域計画研究所代表取締役社長で、京都大学工学博士の三輪泰司さんでございます。各建築関係の団体の代表をされておりますと同時に京都の経済同友会の会長さんでもございます。またアドバイザーと致しましてハーバード大学をご卒業後、ボストンで設計をされ、またギリシアのアテネで事務所を開かれまして約八年建築のほうに携わっておられ、現在京都で事務所を開設されております、大倉建築設計事務所の大倉達也さんをお迎えしております。申し遅れましたが、私、司会の尼川恵一と申します。どうぞよろしくお願い致します。

大倉 どうも大倉でございます。

いま司会の方からお話がございましたように、私はどちらかというと根なし草といいますが、世界の浮浪児みたいな感じでもって、ボストン、アテネと渡り歩いて仕事をしてきたような次第です。それで日本に帰ってきましたのが約六年ほど前で、まだ京都の風土、それから京都の方々とのお付き合いというのも非常に日は浅そうございます。

ひとつ、日本に帰ってきてびっくりしましたのが、あるいくつかの言葉が日常生活、それから新聞に盛んにつかわれているということ。それは国際性とかインターナショナルとか、それから世界とかという言葉がもうどっかの集まりに出ると必ず聞こえる。それから新聞でもインターナショナル

ル、それから国際性、世界市民というような言葉がどんどん出てくる。これに面食らったような次第なんです。それほどまでに世界志向といえますか、そういったものが日本で盛んであったということはちょっと知らなかったような次第です。アメリカで生活してしまっても、ヨーロッパで生活してしまっても、あまりインターナショナルという言葉は聞かない。それから世界という言葉も聞かない。皆なんとなく同化しあっている。

それでひとつ、私が四年間住みましたボストンの、京都と同じ面は皆さんご存知なんです、違う面に限ってちょっとお話をさせていただきたいと思えます。

ご存知のようにボストンも京都と同じ古都でございます。独立戦争発祥の地であり、古い建築物、それから文化を擁した都市でございます。京都もそうでございますが、しかしながらボストンというのは非常に活気に満ちた都市、東海岸ニューヨークランド界限でもいろんな情報が入り、いろんな活発な活動があり、新しい建物もどんどん建っている。アメリカ建築界、デザイン界、文化界、そういったものをリードし得るに足りる都市でございます。それで、ボストンで生活していますと、保存という言葉は確かに聞くんですけども、それと同時にすごく開発が急ピッチに進んでいる。

そこで、これは絶対に保存しなくちゃならないという地区もありますが、他のところはもうある意味で乱開発でもいいんじゃないか。もっとと極端なことを言えば、私が京都に帰ってきていて友人に東本願寺の隣に超高層建ててみたいですね、とい



ようなことをちらっと、言ったことがあります。京都は優れた古建築と、優れた近代建築が共存し得るような、そんな都市であっていいんじゃないか、というのがポストンと比較しての第一印象であります。そしてまた不思議なことを感じたのが、学園都市の構想なんです。これ、三輪先生隣において、こんなこと申し上げるのは大変失礼かも知れませんが……

しかしなぜ、あんな企画をするのか、今もってわからない。この文化都市の京都、学園都市であるところ、そこからわざわざ大事な文化施設をどんだん京都市から出してしまふ。これはもうほんとに京都の地盤沈下に一層拍車をかけるような計画じゃないか。それからもう一つ、歴史的にみて新都市といえますか、ニュータウンの企画というのは、ほとんど成功した例がない。筑波学園都市にしても、今もって暗中模索の状態であり、もつと古い話になれば、ブラジリアのニュータウンですか、それからシャンディガール、インドの。最初は強制的に人がそこに移住させられて、そこで住んで、政府機関の運営をしたり、学問研究をする。だけでも人工的につくられた都市というのは今もってまだ明が見えないというようなものであるというのが、現状でございます。

それから先程の分科会のお話でもって、そういう場合出ました京都の色彩ということなんです。平安時代の京都の町を想像すると、私は歴史学者じゃございませんけれども、もっと華やかな色がいっぱいあったんじゃないか。べんがら色があり、グリーンがあり、青があり、それから金箔があり、

神社仏閣はもうそれぞれ華やかな色をまとうて建っていたんじゃないかと思うんです。

あんまり勝手なことを言う、こいつはどうも余所から来て勝手なことを言う、というようなことになるかも知れませんが、ひとつご容赦お願いしたいなと思います。

三輪 私も京都はものすごいナウいところやと思ってるんです。どなたからでも、どんな、反論も含めてとにかく全員にご発言いただきますので、よろしく願います。

沢野 私は室内のほうに属します沢野と申します。宮崎木材工業、いわゆる夷川通りの古い家具屋さんで、株式会社宮崎と申します。やはり先程のインターナショナルとか、こういうことに絶えず意識があるわけなんです。

それと先程大倉さんのお話にありましたように、やっぱり京都というのは、どうもそのタガにはめられるという感じ、建築においても、祇園とか清水あたりの地域保存ですか、ああいう新しい建物を建てるにしても、表の格子をつくれとか、屋根は瓦とかいうようなこと、そういうことのタガというものがあまりあり過ぎて、もっと大胆に新しいものをつくっていけば、自然とそこに国際性というのが出てくるんじゃないかと私は思うんです。

藤川 私も長年宮崎の沢野さんと同じような、仕事しておりまして、二、三年前に退社致しまして、自分で細々とインテリアの仕事をやっておるんですけども、確かに、特に京都というのは、以前もあったんですけど、日本全体が島国であるだけに、



内輪にしか通じない。外国というのは、なんか川ひとつ隔て、山ひとつ隔てたら隣の国だから、言葉も違わかわりに、行動とアクションとか、手を握り合うとか、なんかそういうことで非常に融け合えると、本音でほんとに話ができる。ところが日本はなかなか、特に京都は本音と建前の差がひどいと思うんです。だから本当のこと言うて商売失敗したと、嘘のこと言うて成功したと、これが非常にあるように思うんです。

京都・青山通り

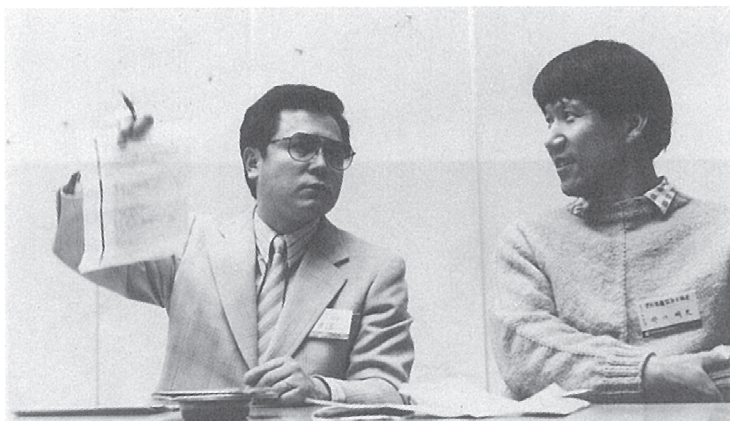
志摩村 例えば大文字ひとつにしても、今だと上に上がらないと見えない、そういうのが京都に生まれた者としてすごく寂しいと思うんですね。

長戸 まあ、京都の人の性質、人情というものもありますけれども、例えばいま一番私は京都で寂しい思いをするのは、四条商店街の地下道、まあまさにあれは地下道ですね。地下街になってない。ですから、我々が属している設計の団体でも、これからそういうことをもっと意識をしていかないかんのじゃないかということを感じてるわけです。例えばいま丹下健三先生が東京都庁の知事のプレインの一人になっておられます。で、いろんな意味で東京都の行政に対していろいろ提言なさっている。我々もそういうふうな、我々の知識を生かして、行政の中にもっと意見を出せるような立場をつくる、そういうのには、今までどうも我々は中にこもりがちで、外に対する努力をしなかったし、ものを設計することのみにとらわれて、社会性が薄くなかったかと、反省しています。

米田匡 私、室内に関係している米田と申します。私が住んでるのは上賀茂でございます、去年の十一月でしたかね、地下鉄あがりましてね、ちょうど上賀茂の橋を歩いてたんです。そうすると、関東の女子学生さんでした。「おじさん、京都に青山通りというのがあるそうですね」こう聞いたんです。待てよ、そんなのはいはずだと私思うてたんです。そしたら雑誌に書いてましたよと、北山通りですね。あのへんのことを言ってるんですね。実際は中に変った建物がぼつぼつあるだけで、あくまで点々で商売やってるだけで、非常にさびれていると、こういったことを私聞きました。さらに、余所から来た方とにかく京都はどうなんだと言ったら、線香くさくて、お寺が多くて、なんとなしに我々の、日本人のもってる心の故郷みたいな感じが、こういう表現をするわけですね。ただ反面、京都で非常に面白いところで、古いところに変った建物がぼこぼこあると、非常になんかユニークさをもってる都市じゃないかろうかと。こういうような発想をされてる。

米田健 日図に所属しております米田です。話が下手ですので、無茶苦茶になると思うんですが。僕もインテリア関係で、たまたまドイツのフランクフルトでハイムテキスタイルであるんですが、それ出品した時に思うんですが、やっぱり一つの個性があればね、どんなところで勝負できると思うんです。その個性の集まりで一つの大きなものができると思うんです。

木下 室内やつとりまます木下です。私も所属は先に沢野が言いました宮崎木材工業です。先程のお



話にありました、国際性とかインターナショナルという言葉が書いてあるとは、あれを見ただけで私もムシズが走るんです。国際性とかいうものは一体なんだという、そんなものはないという考えをもってるわけです。自分というものを大切に、それが全てだと、その成果がいわゆる国際性とかいうことになるんじゃないかというふうな感じ方をしてきたわけです。

京都には昔から非常にいいものがあるわけですね。現在も残ってるわけです。ところが振り返ってみたら、まあ建築でいえば代表される古建築とか、数寄屋とかお茶室、これ、実際京都で、そのデザインできる大家がおるかというといけないんですね、不思議に。皆東京に集中しているわけです。私は、京都というのは行政だけじゃなくて、それ以前のガンがあると思うんです。それは、いわゆるマスコミと、文化人ですね。ある意味で学園都市ができて、そういう人たちが出ていくことは、かえっていいんじゃないかと、先々ね。それぐらい変な考えもってるわけです。

実際、京都が発信できるかと、まあ、今のままだったら私は絶対できないと思いますね。それよりも、京都をもう一度見つめ直して、京都にあるいいもの、これをいかにうまくやっていくか、ということからスタートしなきゃあいかんのじゃないかと。

齊藤 日図に所属してまず齊藤と申します。私は、今日は質問という形で来んですけども、建築されるうえで、特にどういうデザインがほしいとか、建てるにあたって、現在出てないようなデザイン

がどういうものかいうのを聞きたくて、今日ここに来たんですけどね。だから京都だけに限らず、僕は日本全体で考えてもらって、その答えをちょっとお聞きしたかったんですけども。どういうデザインがいいとか、そういうことをお聞きしたかったんですけどね。

内丸 今の問題で、外野のほうからちょっと教えていただきたいというふうに考えているんですが。

ちょっと建築とは全然違うんですけども、作家の遠藤周作さんが言ってたと思うんですけども、最初キリスト教が日本に入ってきた時に、宣教師たちが日本に一番絶望したのは、キリスト教が全然認められぬというやなくて、その人は信じしてくれる。それは確かなんだけど、どうも信じ方が全然違うというか、彼らが信じるキリスト教は、彼らの土着的な宗教に根づいたキリスト教だったということで、そこらへんのところに宣教師が非常に絶望したというふうなことを遠藤周作さんが書いていたんですけども、何か新しさという時に、特に京都の新しさ、日本の新しさという時に、そういう新しいものでも、常に自分らのなかに根づかせてさらなる新しさをつくっていく原動力みたいなものが、日本の文化にはある。特に京都においてはそうではないかという気がするんです。

さらに京都の場合には情報はさほど考えすぎるわけではなしに、新しいものをつかんだ時に、何かそれを自ずから新しさの中の自分にほんとに適するような新しさを出して生かせるようなポテンシャルティが京都には特にあるんじゃないか。関

西には特にあるんじゃないかということです。新しいものをつくる体質、それを否定する体質、二つあって、それが絡み合いながら動いていくのが京都なんじゃないかという気がします。

ライオンの胴掛け

正木 グラスアートやってる正木です。もともとはステンドグラスから始めたんですけども、今ではガラス棒とか、それから透明な建築用に使う板ガラスを使って、グラスアートの的にやっています。

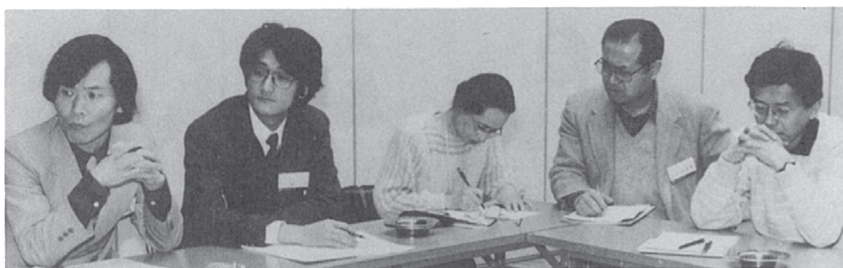
いま皆さんのお話聞いている中で、国際性とか、京都という話がしょっちゅう出てくるんですけども、なんとなく京都にムチャクチャとらわれ過ぎてんのちゃうかなというのが私の気持ちなんです。国際性、国際性と言われるのは日本だけやということ、大倉先生もおっしゃったんですけども、一つは京都人であること、京都の特性とか、京都の特色というのを喋るとか、自覚すること、このメリットと、同時にデメリットがひびいてくるというような気がするんですね。京都の町並みも好きだし、雰囲気も好きだし、京都人のもってる感性も皆好きなんです。だけど、なんとなく京都、京都と振り回すことはあんまり好きじゃないという、そこらへんです。

太田 太田でございます。

私もたびたび海外のほうへ行ってますので、こちらのほうの建築のお話もお伺いできるかしらんと、思って、インテリア関係、室内装飾とか、そういうのがちょっとお聞きしたかったんで、こちらを選ばせていただいたんでございます。

井口 室内の井口でございます。僕は室内設計には所属しているんですけども、どちらかというと自分で家具とかそういうものをこしらえてる者なんです。ちょっと今お話を聞かせていただいている、はてな、疑問を一つ一つ解くことによって世界は見えてくるというふうなテーマなんですけども、よけいわからんことが出てきまして(笑)、まったく頭の中が混乱してるんですけども、伝統とはなんやろなと思うんですね。

江畑 一般で参加させていただきまして、江畑と言います。ID関係の仕事をやってるんですけど、今日は建築とインテリアに関してちょっと教えていただきたいんですけども。新しいところへいま家を建てとるんですけど、今までの日本建築ですとインテリアというのはもう素材が自然に決めてくれたと思うんです。最近は壁紙から天井材から全部選ばんならんとということで、工夫しているわけです。それで容れ物はなんとかできて、今度はそこへ入る家具ですね。家具をもう全部新調すればインテリア・コーディネーションうまくいくかもしれないんですけど、今使ってる家具をなんとか生かしてコーディネーションをやりたい。そうなりますと、つい五年ほど前に大枚はたいて飾り棚を買ったんですけども、それも使いたいということになりますと、ダイニング・リビングというようなところへ置きますと、様式が恐ろしく違うんですね。以前買ったやつの様式に合うものを探しているんですけども、ないんですね。デザイナーの方はどう自分の思う新しいデザインを発表される。しかし、道具類はこれ一つ買えば何世代



も使えるわけですね。昔のほんま物の木を使ったものは何十年も使えるということで、ころころ、ころころデザインを変えられますと、その都度全部買い替えなあかんわけです。感性、感性言いながら、あまり気にせずに様式をゴチャにした生活こそろろ反省してですね、このへんで様式を確立してもいいんじゃないかなというような気がするんです。皆さんどう思われてるでしょうか。

藤本 一応室内に所属しております藤本です。僕自身が今住んでるところが古い新町室町のど真中なんです。祇園祭りのところなんです。今までタペストリーとかいろんなもんが飾ってあったんね、使えんようになったんですわ。それで「鶴」のタペストリーを相当お金かけて、新調したんですわ。

例えば祇園祭りの胸掛けいっぺんですけど、去年つくったのがライオン、ものすごい突飛なんです。祇園祭りに、これ山口華揚先生の原画なんですけどね、ライオン。僕あれつくった時にびっくりしたんですわ。同じ町内におりながら、ようこんなしたなと思うて。ただ町内の古い長老さんとかいろんな役員さんがたくさんおられますんでね、お聞きしますとね、どないしてもこれがしたかった。で、昔からある伝統を破って、古い模様じゃなしに、ライオンで、あんなもん、とにかく皆さんびっくりしやほすと思いますわ。それはたまたま町内が、市とか財政とかそういうこと関係なしに、一遍やってみようやないかと、その発想が面白いものを生んだんです。

甲斐 一般参加で、何もわかりませんが、ただ、室内と建築のことに興味があって、いろいろなお

話を聞いて、自分を高めていきたいと思っておりま

小林 最後になってしまいましたけど、私、京都デザインセンターと申しまして、ここをやってます柴田のところで働いています。で、これは私どもの柴田のコンセプトでもあるんですけども、毒を制せずして薬は得られない、というような、そういうようなところからお話が合ったようなんですけども、先日、金沢と広島にあるちよつとコンサルタント的なことで行ったことがあります、金沢で僕がものすごく驚いたのは、あそこも小京都と呼ばれている古い町なんですけども、街中が大革新されてるんです。メインストリートは石畳ですね。で、その格好よさたるや、まあヨーロッパの町にひけをとらない。そのすぐ横に兼六公園、それから兼六公園に結ばれていく小さな路地が、水路みたいな、京都でいうと高瀬川みたいなところが小さく流れてまして、で、表通りに出た途端に大変大きなデパートがどかんと突然できあがっている。そういう新旧というものがダイナミックにうまくつくられてる。これは金沢というスケールがそれをさせているというのがすごくあると思うのが、調べていくとだいたいわかってきたんです。それともう一つ、広島に行きまして僕が驚いたのは、これ四十年ですかね、戦後復興で。四十年でここまですばらしく街ができるんだという一つの見本だと僕は思いました。

ところでいま京都で、なんで生きてると思いますか。伝統産業とか、なんか今僕らが京都で売ろうというのは、観光ですとかね、寺院とか、あ

なもので未来が生きられるとは思えない。これだけで未来があるわけがないということを皆で考えて、新しい都市のなんていうんですかね。生きていくための栄養をもう一遍つくり直さないかん、と思います。もうひとつはそこに住んでる市民そのものの性能を上げなきゃいけない。市民の性能が上がらないと、もうダメです。これはね、僕はもう全市民にどうかで言わないとダメだと思うんですよね。

中規模都市の新美学

藤川 我々はインテリアのほうなんですけども、よく注文主が、建築設計屋さんなんか非常にいいやないか、人の金で自分の作品をつくらしているやないかと。自分は一切金使っていないやないか。で、後世に残つると。で、確かにそれだけの頭脳と何とは出しておられますけれども、注文主は何億というお金を使ったと。そういう点で非常にいい商売だなという具合に羨ましがられている面があるんじゃないかと思うんですけども。

で、その割になんか、設計なさってる先生方はあまりいい目をなさっていないようにちょっと思うんですけどね。

小林 大倉先生、なぜ京都にいらっしゃるんですか？

大倉 これはまったく個人的な理由なんです、僕ボストンに長く住んでましてね。ニューヨークほど大都市ではない、東京ほど大都市ではない、まあ中規模都市なんです。都市の端から端まで、まあ場合によって歩こうと思えば歩ける町である

ということ。それから古いものと新しいものが非常にお互いに刺激合って存続しているという。ですから、ボストン、アテネから見直した時に、非常に魅力を感じたということが一つで、自分が仕事をしている時に町の端っこが見える都市で生きたいなと、仕事をしたくないなというふうなつもりでもって、どちらかというと京都を選んだという

ほうが正解だと思うんですけれども。それから祇園祭りのタペストリーでもってライオンを町衆の老人たちがあえてつくっちゃったというお話。本来これ町衆が京都で昔からもっている性格だったんじゃないかなという気がするんですよ。タペストリー、今でこそ古いものを大事にぶら下げているけれども、あの当時というのはもう日本に全然ないようなものが絢爛豪華に飾られていたという、それを先程新しくライオンをつくったという話を伺って、あ、やっぱり町衆の心意気というのはまだ脈々と生きているんじゃないかなという感じがしたんです。

三輪 やっぱりね、町衆がやってる、頑張ってる、室町あたりがタペストリーとかやるけど、大衆はまだ超高層ビルつくるほどの銭はないんですな。僕はこれ日本中から金集めて、あるいは世界中から金集めてつくったらええやないかと。現にえらそうに言うところけど、お寺なんてあれ京都の人間だけでつくったんちがうでえと。あれ日本中から金集めてつくって、たまたまあるだけで、京都は場所貸してるだけで、皆外からやってきたんやないかと。今もうちょっと寸法広げて、世界中の金でつくったらどうやと。



大倉 建築士会から、ある出版案内がきたんです。それで何かなと思ってパラッとカタログあけて見たら、民活ですね、日本の。民活プロジェクトの本を紹介する案内。それを見ましたらね、民活のプロジェクトが全部各都道府県の分が列記してあるんです。東京はいっぱいあるんです。千葉もいっぱいあるし、横浜もいっぱいある。神戸もいろいろあるし、大阪も、大阪城界隈のがざあーというんなプロジェクト、皆これ民活です。京都の欄見ると、二項目しかない。一つはあそこに掲げている建都千二百年、それが一つ。もう一つはなんだか忘れちゃったけど。

小林 二条駅周辺。

三輪 役所は頭だけ使ったらええやないかい。あるいは、時にはね、やっぱり百五十万人もおるの、一つ一つやったら、たいしたことではへんけれど、役所であつたらできると。先程申した見本市会館なんかね、あれは京都府が事業税に二%上乘せしたんやね。それをプールする。だから、まったくあれはこの金だけで、まあ稲盛さんが寄付しやりましたけど、つくって、国の補助金全然貰うてない。二、三%ぐらいやったら、期限五年間とか言うたら出してくれるわけですね。そうやって束にするという方法が一つ。

それと例えば、ものすごい壮大なレストランシアターみたいなとかね。いつまでも祇園町ばかりやないやないかと。外国人の方来て、いつも困るんですね。また祇園町かと。しかもあそこではですね、三十人ぐらい来たらもう入れへんわけですよ。あんなにばっかりではあかんやない

かと思うんです。

米田 今度できるシンフォニーホールもね、やっぱりこれはええ、一番ええというぐらいのものをつくってほしいですね。なんか文化、文化言うてくけど、音楽会のええのんは全然来ませんしね。京都は全部素通りしていくでしょう。

小林 ああいうのこそ、まあここに先生おられますけど、ひょっとしたらアフリカのなんか全然知らんような建築家に頼んでね、で、何故かという話題性だけなんです。もうこれは世界中から見に来てしまうという、なんか驚異的なものがそこにあるんだということ。それは、だから他の目的であつてもいいんです。

尼川 どうもありがとうございます。座長に三輪先生をお迎えし、またアドバイザーに大倉先生をお迎えして、皆様方からいろいろご意見を承りました。これを二カ月ぐらい後に皆さん方にまたまとめとして配付できると思います。本日はほんとにありがとうございます。

●出席者（発言順）

尼川恵一（室内）	齊藤勝哉（日図）
大倉達也（建築家）	内丸恵一（建築）
三輪泰司（建築）	正木友梨（ICC）
沢野周二（室内）	太田玉重（ICC）
藤川一光（室内）	井口明夫（室内）
志摩村ひろみ（KDA）	江畑武美（一般）
長戸幸雄（建築）	藤本進（室内）
米田匡宏（室内）	小林郁央（一般）
米田健一（日図）	甲斐竹子（一般）
木下長生（室内）	松田緑（建築）

国際性とはなにか

日本語

悲しい 哀しい 哭く

楽しい 嬉しい 笑う

表現肌理細やか

日本人

気持艶艶

感性蕩蕩

言葉はネックか

竹村 皆さん、当会にご出席をたまわりまして誠にありがとうございます。『国際性について』ということなんですが、このチームのリーダーを務めます宮井欣二氏を紹介させていただきます。宮井氏は三十九年から五十七年の約十八年間に、主にベルギーのブラッセルを中心としてヨーロッパ諸国で仕事され、海外経験が豊かでございます。フリートーキングという形で国際性についてのテーマを推進していきたいと思いますが、それではまずはじめに宮井さんからお願います。

宮井 至りませんが、ご指名でございますので受けることにします。私はヨーロッパに日本人としては少し長くおりましたが、長くおったことが必ずしも国際人であるということとは別なことで、決して私が日本の国際人であるなどと思いたいだかないようにお願いしたいと思います。それから日本人ばかりで『国際性』をあんまり論じてもうなるかなという気が実は先程からしております、どなたかおっしゃってられましたね。国際化ということが非常に新聞・雑誌等で取り上げられているわけなんです、なぜ今頃、日本だけで、あまり外国では国際性がどうのこうのということと言わないですね。

森 クラフトセンターに勤めております森と申します。今、社長がおっしゃったように、まず国際性とは何かと、我々日本人ですので、特に自国のことをよく知らないかんとということがまず一つだと思ふんですけれども、特にクラフトセンターで

今随分外国の方をお迎えして工芸品を販売しているわけですが、かつては欧米の方が非常に多かったんです。今は隣国であります韓国とか東南アジア系統ですね、非常に目立って多くなってきました。それで今まで英語が主だったのが、今はインドネシア語とか、非常に聞き慣れんような言葉が耳に入ってきます。外人と接すると言っても、ずいぶん肌合いが違って来ているわけです。

藤原 古本屋やっております。御所の前で。藤原と申します。よろしく。

その国際性のことなんです、結局僕なんかを感じるころは、日本人は外国人と喋るの嫌がるでしょう。今朝も僕とくにニューヨークから、銀行マンでしたけど来て、古い本が欲しいというんで、朝のもう十分ほどの間に決めて買って帰ったんですけどね。彼なんかと喋るとね、まだ日本語、日本のことも知りたいんだけど、英語でないと喋れない。だから困るんだと言っていました。浅田 国際性という言葉言われておるんですけども、確かに国際性という言葉言うというところは日本人というのはどうも外国人がでない考えてるやろかなあということがいつも気になってしょうがないという国民性なんです。ヨーロッパに基準を合わせれば確かに我々やっていることはまるっきり反対のことであつたりするわけです、私たちの小さい時はアメリカ人がこないしているからという、単なるそれだけで、それが非常にレベルの高いことをやっているとかいふうに言われたりしてましたからね。

藤原 結局アメリカが今怒っている、ヨーロッパ



が日本に対して怒っているのはお返しがないからでしょう。取りっぱなし、試供品でもなんでも、お金でも、ねえ。ニュースでも。

金原 日図の金原と申します。仕事の半分が墨で書く事ですね。国際性に関わると言えば、前にオーストラリアから一人来た人に、墨を教えてくれということでお話したんですけども、言葉の壁があつてうまくいかなかったんです。そういう墨屋の、自分も教室もつておりまして、これから初歩的なことですが、そういった国際性のあることに関わっていきたいと思っておりますので、そのことを今日は勉強したいと思つて来ました。

久保内 画材店を大阪と京都で経営しております。他に不動産関係の仕事もしております。久保内と申します。近頃、京都で画材店を開くにあたりまして、仕入れで外国に行くことがありまして、他には遊びでヨーロッパとか、いろいろ行ったことがあるんですけども、普段は自分自身充分国際人間であると、生活が朝から晩まで非常に、食事にしても、お行儀にしても国際的なんですね。だけれど外国に出て初めて自分を、日本人なんだなあとということが痛いほど身にしみ入ります。

旗持 私自身も今やはり英語を勉強して、あるいはどんな外に對してものを言うことは大切だと思ふんですけれども、その前にまず充分に京都を知り、日本を知りということだと思ふので、発言させてもらふんですけど、そういう意味で私家に帰って寝る前には必ずいったん着物を着ます。たとえ十分でも着ます。着物を着ないとなんかほつとしない、いいアイデアが出ないということ

なんです。そういう習慣がありまして、私もと日本人、どこへでも着物きていいと思ふし、最近作務衣がファッションでして、大いにそういう着物でもない、洋服でもないというふうな中間的なものでもないと思ふんですね。そういったものが出てきて、もっともっと衣食住を含めて、また五感全て含めて、あるいは第六感も含めまして、そういった高品質、高デザインのもの、絶えず我クラフトマンとして追求していけば、ちっとも世界中どこへ行ってもなら恐れることもないと思ふんです。

浅岡 京都設計家協会の浅岡でございます。私、国際間のいろんなぎくしゃくした問題はやはり文化、それから宗教ですね、言葉の問題、そういうものが一番やっぱりネックじゃないかと考えております。

坂本 国際性というのは、日本の日本人といいますが、日本のアイデンティティをまずもつということと、それからやはり許し合える気持ちといひますか。あるところでお話しますと、ホームステイに学生が来まして、そこでおじいちゃんと一緒に食事をするのが一番いいんだと、もちろん一緒に和気あいあいとやっております。ずっとはじめはいろんなビフテキなんか食べておまして、だんだん日本の食事、ということ、メザシを出した。そうするとどうしても頭だけ残しておくというふうなことになる、やはり日本人はこれ頭から食べるんですよ。僕も非常にいいことだと思ひます。そしたら、嫌々食べました。嫌々食べてですね、やおらその子が冷蔵庫開けて卵を持って



きましてね、うちの国では卵をこのまま食べるんだ。これ人から聞いた話なんです。そしたらおじいちゃんはそのむしゃくしゃと食べたというんです。それから非常に和気あいあいとなっていたという、なんていいますか、相手の慣習を許し合えるという気持ち、これは非常に国際化では大事なことじゃないかと思っています。

クラフトのほうでも何かそういう今の歴史から変わってきたりすることがあれば、また教えていただきたいと思ったので。

旗持 木工なんかで木の椀をつくりますね。あの場合、手に収まる寸法で、だいたい横が二で縦が一だとかいうふうな、そういうことはございますよ。それが一番持ちやすい、使いやすいということです。

宝船は左向き

田中 京都クラフトセンターに昨年入れていただきました。クラフトセンターは、京都の感性を追求したクラフトを勉強する場だということで、私も非常にそのことに感銘しましたんです。実は私とは意匠紙製品、いわゆる京都的な感性をできるだけ盛り込んでいったいいますか、そういうものを生かした紙製品をつくっていききたいという、そういうふうな形の商売をします。いわゆる今の国際性ということなんですが、実は多分に京都だけの商売、日本だけの商いじゃなしに、できることならそれを海外へ、この美しい商品を出していききたいと、こんなふうな形からいわゆる海外で理解される商品、デザインのつくり方というふ

うな形のことを常々悩んでおるんでして、今日、国際性とは何かということで、何かここで一つ勉強できるんじゃないかというような形でこれに参加させていただいたわけです。

遠藤 私は金属装飾品をやっております遠藤と申します。国際化といえますけれども、私のほうの工房においても外人の方が、よく来ております。

言葉はあんまり通じないんですけれども、大学の教授だとか、あるいは向こうの工房の人だとかが時折り、半年、あるいは一年というふうに来ていらっしゃる。そこで一番私感することは、こういう人が来るけれども、あんたんとこ、連れていくからなと人に連絡しますと、いや、わしはそんな一文にもならんもんいやと、こうですわな。

あんたんとこ、一人でやりなさいよ、わしや、そんなもんもう邪魔くそうてかなわんわ。そのくせ店に行ったら一所懸命なって売ってるわけですよ。押しつけてるわけですよ。やってることと言ってることが全然違う。とにかく体裁のいいことを言うてるけれども、全部物売るためだと。それが今問題になってるんじゃないかと考えますね。

だから、国際的な関心のある方、ほんとに交流し、日本のそういう将来を考えていく人が皆集まってやりやあいんだけど、そうでない部分の人が集まってやっても意味がないから、やはりしっかりと頑張らないかということですよ。

藤原 そういうことです。

竹村 よくわかるんですけど。私とは袱紗、風呂敷を主にやります宮井株式会社の企画室を担当しております竹村と申します。いろいろなお話



を面白く聞かせていただいているんですが、袱紗というのは今現在では日本人でもあまり、京阪神は使いますが、それ以外はあまり使わないですね。ところが海外に明治三十年代は相当輸出品としてどんどん送ったわけです。それによって明治時代の外貨獲得をして、そればかりじゃないですけども、向こうでは袱紗とは言わずに、タペストリーとかテーブルセンターに使ったわけですね。それが今、アメリカのいろんな美術館に保管されておりました、それを今のアメリカの人が見て、非常にきれいだと思うんですね。でもどう使ったかわからないんです。それをうちの方に尋ねてみえたり、書面でもって連絡をしてきたりしとるわけなんです。使い方はこういう精神構造で、こういうふうに贈答として、日本人の贈りものとしての習慣があつて、こういう贈り方をする。その精神構造は結果思想といまして、俗なものと聖なるものと区別をする。そのためにこれをかけるんだというね。風呂敷で包むんだとかいうふうに、けじめをビジュアル化するというのか、視覚化していくんだと説明するとわかるんですね。ところがその袱紗に書いてある模様が何を意味してるのかわりにくい。そのへんが非常に日本を神秘的といいますか、不思議な国だということにしているようです。宝船の図案を見ましても、進行方向が向かって左でないとあかんと。なぜなら、これは出ていったら困るんですね、入ってくる宝じゃないと具合が悪い。このようにデザインに対する一つの様式というのが日本ではほぼ決まっております、模様を見ただけでこういうことを気持ちにも

って贈ってくれたんだということが相手に伝わる仕掛けいふのがあるんだと、こういうことが向こうに伝われば、日本人は物語性がある贈答ゲームをやつとるということがようやく理解できる。国際性というのは難しいなと思うのは、日本語では非常にボキャブラリーが豊富ですね。優雅というのと、上品というのと、どういうふうになるんか、そのへんの伝え方は通訳をする人は非常に苦労すると言いますね。ですから、もっとダイレクトに表現をしてあげるといふ努力をこれからやっていかないと。そういう意味で国際性というものをとらえていったらどうだと私は思います。

宮井 まだ時間はたっぷりあるんですけども、先程、私は「国際化」ということと「国際性」ということをちょっと混同したような発言をしまして、今日日本が、国際化、国際化と言ってるのは、だいたい向こうのほうの制度とか、こういうことの取り入れですね。そういうことをやっているということから、欧米が基準であるんじゃないかということとをちょっと申しただんですけど、国際性ということは、なにも欧米だけの話じゃないんであります、これは東南アジアでも中近東でも、皆外国なんですから、国と国とのコミュニケーションを、今までもちょっと話が欧米中心になってたと思うんですけども、我々のもっと身近なアジアの人たちとの場合をちょっと考えてみたらどうかと思うんですよ。

藤原 だから、今会長が言われました、いわゆる韓国、北朝鮮、それから東南アジア各国を日本が差別すると、ものすごく怒ってますわな。全然差

別してるわけやないんですけどね。

藤原 喋るほうを、これから日本人は勉強していないかんということですね。

感性の国際性

浅田 ただ、確かにそうなんですけども、ひとつ音楽で言えば、音楽そのものが喋らなくても通じ合うものがある。クラフトにしろ、デザインにしろ、そういった造形的な一般芸術関係全て同じようなことが言えるんじゃないかと思うんですけど。森 茶寮で本をちょっと読んでましたらね、アンケートが載ってましてね、日本人が行きたい国の国民の方は日本人嫌いやと。日本に好意的なほうは日本人の方が好きでない。明らかに逆に出ていて、それに対して日本人はどうですかね、交流の仕方ということ自体が相当おかしいんじゃないかというような。

浅田 先程の話にちょっと戻しますけどね、音楽は理屈なしに共通性があると。先程、竹村さんがおっしゃった柄なんかの場合、いちいち説明しなければ理解してもらえないのかと。そうなってくるとちょっと面倒だなと思うんですが、我々も外国のものをそんなにいちいち理解しながら、これはいいか、悪いとか、ほしいとか言わずに受け入れていいる部分が多いですわね。間違った受け入れ方もしていると思うんですけどね。でも、やっぱり本来そういうものとちがうかなというところもあるんですよ。

田中 例えば府のほうも海外へ駐在所を設けたり、市のほうもなんか一所懸命やっていますけども、

これにしたって、ほなそんなに真剣になってやろうとするのなら、そんな課があるのかと。貿易局というようなものでもあるのかと思ったら、そんなものないんですね。貿易課もあらへんねんね。商業貿易係ですね。これではそれものにならないですね。国際化という中にもやっぱりビジネスのこともありますし、いわゆる京都の国際化ということでは。

宮井 それだけそういうことに対応できてるかということですね。

旗持 私思うんですが、先程の話聞きますと、建都千百年当時は確かにそういう疎水ができた、あるいは平安神宮もできたりと、すばらしいそういうものができたりして、その頃は京都市のいわゆる日本におけるGNP、これが確か十六、十七%だったというんですね。ところが今は一%なんですね。そんなところに、私、今おっしゃっているような、バァーと先に出てくるけれども、一向に現実が伴わないという、このへんの経済的な問題がちょっとあるような気がするんですね。

田中 宮井さんにちょっとお尋ねしたいんですけれども。ヨーロッパの感性というのは非常になんか日本の感性というんですか、京都の感性と近いんだという話を……。

宮井 そういうことが言える部分があると思います。といいますのは、やはりいいものは和のもんであれ、洋のもんであれ、共通して、いいものはいいということですね。京都の人ちゅうのは、いいものを非常によく見てますわね。着物でもいいものでますし、それらは文化的遺産という問題



がありますね。京都は多いですね。ヨーロッパもやっぱりそれが言えると思うんですね。随分やはりのいいものが遺っておりますね。だから、そういう意味で今おっしゃったようにちょっと感性が似ているんじゃないかと、そういう面からは言えると思います。

田中 だから、あなた方が非常によいと、これは自分とこの商売の話になってくるんですけども、あなた方が日本の国内でよく売られて、とてもよく売れるという商品であるならば、ともかくヨーロッパでもよく売れますと、考えていただいてもよろしいと思うんですね。私ら、むしろ今までのアメリカとの取引では、単純に言えば、日本で売れないようなデザインのものが向こうで売れるというふうな経験をしばしばされたことがあるんですが、ヨーロッパ人は非常に日本人、京都のそういう感覚に近いんです。

宮井 それは言えると思いますけどね。これはものにもよりますけども、やはり技術的なものとか、そういうものはわざわざ向こうのためにこうしろとか、向こうの人はこうだからこうしないかとか、そういうようなことはないんじゃないかかと思えますね。やはり本当にいいものをつくって、持っていくということが基本ではないかと思うんですね。

田中 それと、割に観光客の方もレベルが高なっているでしょう。日本人のレベルが高なっていると、経済的にね。それで観光客ちゅうたら街で売っているような、こんな吊しもののね、お土産を買うだけが観光客やないんですね。むしろ京都へ来た

時に、まあ言うたら嫁入り道具の呉服を買うとか、和装小物を買うとか、もっと伝統工芸のいろんな漆のこういうね、塗り物みたいなものを買いたいとかね、そういうお客さんがものすごく多いですよ。そういう意味でいろんな産業が皆恩恵を被るということね。百貨店なんかでも聞いてみると、観光シーズンとシーズンオフで、一般のお土産屋さん以外の普通のお店も売上に変化がある。そんなこともよく聞いているわけなんですけどね。

遠藤 実は僕ら、そこが知りたいわけです。結局このままでいいって、京都について語られてきていることの目的が果たせるのかどうかということですね。だから国際性云々の問題にしても、やはり外国のいいデザインとか、やっぱりいい文化とかも吸収したり、我々の文化というものが果して世界にどう受け入れられているのかということを、考えることが僕はやっぱり国際性の基本だと思うんですね。

宮井 今日は、本題の話からちょっと京都論に入りすぎた感じがありますけれども、これは皆さんが京都をいかに熱心に思っておられるかということやと思います。時間もまいりましたので、これでお開きにしたいと思います。

●出席者（発言順）

竹村昭彦	（KCC）	旗持 宏	（KCC）
宮井欣二	（KCC）	浅岡幹夫	（建築）
森 勝久	（KCC）	坂本克也	（建築）
藤原 昭	（KCC）	田中良一	（KCC）
浅田篤志	（KCC）	遠藤泰一	（ICC）
金原保則	（日 図）	土井妙子	（KCC）
久保内信子	（一般）		

JAGDA

グラフィック
マルチパワー

アイテムはグラフィック
エディトリアル
フアッション ID
デザイン・スピリッツ
パッケージ
ポスター
都市

グラフィック・マルチチャンネル

田積 最近僕感じてるんですけど、今日のテーマの、「インターナショナル京都」、「京都の着だおれ」、まあこれもあんまり関係あるかどうかわかりませんが、伝青の「ものづくりから、ものひるめへ」、それから「国際、京都、建都千二百年」：とは、「これも全体的な京都としての問題点やと思います。それから「景観都市の色彩を考える」、それから室内・建築「京都発・一九九四年」という、京都は世界に発信できるだろうか、それから「国際性とは」、それから「二条城に天守閣つくろう」「やないかなんて、こんなことが全部出てきてるんですけども、JAGDAっていうのは、なんか僕は最近考えるうえにおいて、この一から九分科会の中の要素全部をもっているのがグラフィック・デザインじゃないだろうか、そういう仕事の柄でないだろうかと思うんです。

たとえば昔ですと、家の横にこれぐらいの形で、何々通りとか、何丁目とか、非常にクラシックな形でこんなもんが出てたんですけど、最近はまだ国際都市とかいうことで、当然ローマ字も出なくちゃいけない。その場合の形の処理の仕方だとか、また京都のもっている色彩でなんやろなというように、京都のテーマ色でなんやろなとか、いうような問題も、ただそのジャンルの中だけで語るんじゃないくて、全てに参加していかないけない。また参加の遅れていたんが、またグラフィックであるというのが今日の現状でありますんで、大いにそのへんを出してもらって、進行していきたいな

と思います。

嶋 いま田積さんがおっしゃってるような状態に僕は近づいているように思うんです。そうなると思うんです。現にうちの事務所で今受けてますが、宝塚市の陸橋がありまして、その下の側壁のデザインと、その傍にある警官の詰所と、その奥にある公園のモニュメントをせえと言われたわけですね。行政がグラフィック・デザイナーのほうにそういうことを頼んでくるということは、逆に言うと、グラフィック・デザイナーでしかそういうことはできないと思うんですね。つまり都市総合の美観というふうに、全体像としてとらえるとしたらそれはグラフィック・デザイナーの仕事だと思えますんで、そうなると、グラフィック・デザイナーというのは、ゼネラリスト的な立場になるべきだと思うんです。

大野 私、大野と申しますが、ちょっと私の個人的な意見なんですけどね。いわゆる今までのグラフィック・デザイナーの仕事というのは平面のデザインのことですね。友達に建築デザイナーがいますが、例えば彼らに言わせたら、柱を建てて、そこに人が何人か住むわけですから、一本こけると人命までもすこす損ねてしまう。そのデザイナーのレベルで生命までかかっているみたいなことがあってね、そのへんで建築の場合、機能性みたいなもんを非常に大事にされていると。僕はどっちかというと、飾りたてたり、なんかデザインしなあかんねんやみたいな形でね、ケイを引いたり、例えば色をさしたりとか、なんかそういうことがものすごく習慣になってたんです。これから



は街とかね、外へ意識が出ていく。さっき田積さんがおっしゃってた看板にしても、そういう類のものまで機能性を主体にしてものを考えていたからね、もっと広い意味での力になれるんちがうかな、そういうふうな感じでした。

橋本 橋本と申しますけど。僕はどっちかというとコピーが中心なんですけどね。グラフィックという難しい、僕まだ勉強不足でもうひとつわからないんですけど、広告としてちょっと話させてほしいんですけども、以前ブームになった時からずっと僕は関西中心で仕事してるわけなんです、やはりなんにしろ、東京でやればカッコええ。向こう側ふうの、僕らでしたらコピーを書いたりね、向こうで人気を集めたようなビジュアルをもっていけばスポンサーが喜んだという、そういう時代がついの間まであったと思うんですよ。

というのは、先日北海道の電通の人で、その人もコピーライターなんですけど、彼の「東京発十三の忘れもの」という本を読んだ時につくづく思ってたんですけど、もうやっぱり昔は地方の時代と言われましたけども、これからはますます地域密着の時代だと思うんです。で、なんでも東京がカッコええということ自体がおかしい。それを読んでいて、僕らも言葉足らずかも知かんないですけど、広告なんか特にそこらへんの、いま皆が暮らしているその横とか後ろにね、隠れてるものを探してくる。これなんですよ。例えば商品でしたら、商品なり企業というのを結びつけていったらこういう一つのグラフィックのチカラというのが見出せるんちがうかなと。

恩地 実は京都デザイン協会の中で、昨年の十月から研究業務というのを開始したわけです。何をやるかという、テーマは「京都、都市、美観研究」。これは最終、年次的に必ずマスタープランを世の中に出していく。これはもう絶対公約したから出す。というのも、これは多分自分自身に対してもですけど、これはグラフィック・デザイナーであれ、インテリア・デザイナーであれ、なんでもこう無力なんだろうかと、非常に腹がたっている。僕は、もう少し先の話になりますけど、ここにある『絵葉書的な京都よ、さよなら』というコピーに引っかかまして、で、これは非常によくわかる。よくわかりながら、あえて絵葉書的で何が悪いかわからないのを僕は言ってると思うて、どこが悪いかわからないのを証明してみようと、それができたら楽しからうなと思ってます。

田積 今の段階で、市民権を得るという項目が出たというのも、この十一団体に、JAGDAというグラフィック団体が加盟したということも、まだ我々に市民権が得られてないという現実があることです。たとえばグラフィック・デザインを親父だけが職業にしてるんじゃないって、家族も子供も皆そんな感覚充分もってやってる、トイレはピンクがいいとか、：なのに、なかなかある意味での職業としての市民権が得にくいといううなところがあった。なにしろグラフィック・デザイナーは非常に器用な職種で、なんだってできちゃうんですから、じっと地下にもぐってても、きつとお呼びがくる時が必ず来るだろうと。

森野 先程も、グラフィック・デザインとは、現



在どういうふうな形になってるかという、まあ説明があったんですけど、私の感じてるのは、純粹芸術の、例えば絵とか彫刻と違う点は、グラフィック・デザインの場合、依頼者があると思うんです。いわゆる親方があって、発注して、それに発注者の気に入るようなものをつくるという、そういう一面は、これはグラフィック・デザイナーがどうしても抜き差しできないもんだと思うんです。文化性みたいなもんが、いわゆる経済性とか、そういうもので押し潰されている現状、非常に歯痒いんです。

京都デザイン考

奥田 実は、私もKDAとそれからJAGDAと両方書いてるわけなんですけど、もうKDAはいわゆる発足当時に、まあ言うたら発起人みたいな形で出発したわけなんですけれども、その時点で皆さんおっしゃってたような、その職能を越えた時点でのあらゆるジャンルの、いわゆる一人間としての、デザイナーとしての感覚を伸ばして、それで新しい波を京都から起こして全国に波及さそうというようなことで出発したんですね。だから二年目に、まあ私が主張して、もうジャンルの壁を破ろうとしたんです。

それで、この間東京でデザインと紙飛行機をドッキングしたというような展覧会をやったわけですけども、その時に私びっくりしたのは、国際的評価を得てる紙飛行機の大家が二人も見にきてくれたことなんです。こういう紙飛行機の作り方があるんかというようなことで、こっちも感激

したわけですね。向こうも非常に感激してね。だからやっぱりね、そういうジャンルを越えたところでの運動を、啓蒙していくというのも一つの方法やないかと思うんですけどね。

小林 今コピーを見せてもらっているんですけども、『退屈させない京都について、語り合いたい』で、すごくいいなと思うんですけど、現実にはグラフィック・デザインの仕事やってまして、それで京都の街を歩きますと、京都にはデザイナーっていないのとは違うかなと思えるぐらい、なんか取り残されているというか、そういう部分がものすごくあると思うんですね。

忙しかったっていうふうに言うてもらおう事があるんですけど、確かにすごい忙しかったんですね。昔と比べたら、一日かかってしっかり描いてた仕事で、今やったらもうそれが一日に何枚もできると、それで結局忙しなって、仕事がすごく早くできるようになったから、その分余裕ができたかというのと、全然ないんですね。そのへんではその余裕というか、その何か余ったものというの、どこへ行ってしまったかというふうに思うんですけど。それと、味のあるデザインですか、そういうのはそれぞれあって、まあ隠しもっているというか、あるとは思ってんですけどね。

今村 私は今までにテキスタイル・デザインと、それとグラフィックとやってきて、今一番多くはパッケージデザインやってるんですけどもね、今すごく感じるの、スポンサーの意見と、自分がデザインしたいなというのと、すごくギャップが出てくる場合があるんですね。それで、材料



とか値段とかいろいろあるんですけども、それと闘ってデザインをやっていくのもう一つの方向なんですけれども、もう一つすごく感じるのは、最近はラッピングコーナーでありますでしょう。それをまた別にして売ってるわけですね。まあそれはすごいいいことだなと思うんですね。デザインやっけない人がね、もうすぐくセンスがよくなくなってきたと思うんです。全部仕上がったものよりも、自分で何か手を加えたい、そういうデザインをやっていくのも一つだし、違う方法があるんですね。スポンサーと闘ってやっていく方法と、一般人ておかしいですけど、デザインやっけない方の意見をプラスさせて仕上げる方法とね。私は今ラッピングというものに、すごく魅力を感じてるんです。

恩地 一般の人のレベルが、これ、もう確実に上がってるんです。だいたいどっちかというと、デザイナーより上のケースが多いですね、もう。それはデザイナーがよくしたという、だから大いに貢献したんですから誇らしく思っているんです。例えば京都、都市。京都、都市であえてつけたのは、京都、京都という意味だけ言いますと別の意味があるんですね。都市をあえて後ろにつけてるのは、これは百五十万の町ですから、都市なんですわ。先程単なる地方都市というような話であっても、数字的に単なる地方都市ではなかなかないです。

とにかく街のことを考えると、個性よりは秩序のほうが先行する。ただし、その秩序をつかさどるにはものすごいやっぱりプロの見識は導入すべ

きで、あっちこっちにあたりさわりのない今の規制、のレベルではない。ですから、そこにこそ、徹底的に導入し、そのあたりディスカッションされて、こうだという結論はやっぱり出さなきゃならないと思います。

嶋 今なんか割とさらさらと流れていくような気がするんですけど、確かに若い人に感動を与えるような条件がなければ、若い人が入ってこないというような問題点とかね、それを街を規制していくというような問題とかがありますね。

それはなんか、そのままずっと皆ふらっといつてるけど、若いものに感動を与えてね、もう一つその上にまた感動を与えて、慣れてまた感動を与えて、一体どうなるのか。例えば今の若い子なんてね、若い人いますけども、京都へ遊びにきて、丸い字で「京都ってとってもすてきなところですよ」と書くような人たちに感動をどないして与えるのかと。そうたいして感性のレベルが高いと思えないわけですよ。で、そうなると、小林さんの話やないけども、そういうものを受け入れる下地がもう若者にはないのに、どうもデザイナーはそこへどんどん迎合していつて感動を与えようとしてるんじゃないかなという問題もひとつ出てくると思うんですよ。

大野 例えば、僕らものをつくる立場の人間ですわね。なんかつくりすぎているのか、なんか逆に均一につくりすぎているというか、そんな僕らはものすごく感じるんですわ。例として思うのは、ええか悪いかはわからへんけども、つかしんという街がありますね。結局なんかああいう建物、横

も上も下も全部つくられたところに、ぼこっと人間が放り込まれてね、そこで遊ぶと。例えば三つの子供がそこでそだっていくと、とても恐い事じゃないかと思うんですよね、これから。例えば標識にしても、田舎行ったら牧場の標識があったりしたとき、人間としてもすごうホッとするんですね。なんか一人ずつが自分のためにつくったやつが、ずうーっと寄せ集まって、馴染んで、とんがってへん。いつまでも耐えられるっていうとおかしいですが。

乾 確かに目新しいものを次から次から出していたら、最後行きついてしまうんじゃないかというなんあるんですけど、そういう中で逆にめっちゃくちゃシンブルなものが、見方によっては新しいというところもあるっていうか、逆に私とか、まあ割と若い年代になるんですけど、それがかえって新しくて、目新しいもので注意をひくという、そういう見方もあるんですね。規制を例えば都市にしていくなというのがあったんですけど、まずこのコピーのところで、絵葉書的な京都よさよならというて、単にこの文章をそのままとらえると、京都ていうのを絵葉書で見たら、どこでも、例えば舞妓さんが写ってるとか、お寺が写ってると。それが京都ですよ、というのがあるんですね。逆に、東京というものを、これが東京ですよっていう場合に、何が東京かっていうの、例えばビル一つ写したって、別に大きなビルは大阪にあるとか、札幌にでもあるという形で、特色がないんです。橋本 国体に向けていますバスが走ってますよね。デザインされた方、もし関連されていたらお許し

願いたいんですけど、僕はめちゃめちゃあんなに嫌いなんですね。個人的に言うたらね。一番最初に出てきた時にね、京都の恥やんかと。で、そんなやつたら、あんなもん描かんといてほしいわていうのがね、ものすごう個人的に思うんですね。例えばグラフィックやってる人間がもったんかあの時に参加できてたらね。通ってて皆が、ああええなあ、国体がもうじきあるねんやなあとかねで、いろんなイベントがこれからあるうとしますよね。その時のシンボルマークね。未来くんいうのも、僕なんかダントツに嫌いなんですね。なんか見てて、なんでもっと新しいもん、なんか表現できひんのか。

都市・内部へ

田積 そういう意味で、今日僕冒頭に言ったグラフィックっていうものが、意外と幅が広いわりには、参加しきれてなかったという、そういう公共施設っていうか、公共団体にアピールがされてなかったという問題が、これはもう自業自得ですから仕方ないですよ。ですから、これからまあ一つの建都千二百年に向かって、まず我々グラフィック・デザイナーっていうのは、その下地づくりがまず必要なんですよというのが最初の話なんです。それがあれば恐らくそういうこともまた国体のバスがどうだとか、それから国体のマークだって、僕にいわせれば、一般公募してんだから、やっぱりそれに参加して出すべきであって、出さなかったということもグラフィック・デザイナーの大きな責任であつただろうという反省もするし、そ



れはやはりアピールされてないから、恐らく行政として、どこへそういうものを依頼したらいいのかというような問題点がまづなかったということ。そこに大きな問題がある。

嶋 先程のお話でね、都市美観に関わる非常に広い視点にデザイナーがいる。で、まあそれでいい。ちよっと全然角度違うかもしれないけども、さっき彼が、退屈なのは嫌だというふうなところがありましたでしょう。なんか、そうじゃなくてね。僕さっきから小林さんが言わはるのに共通すると思うけども、見る側がね、退屈させられたら困るんやというのにデザイナーが迎合してるんじゃないなくて、デザイナーがもっと見る側に、退屈だって一つの感動やというぐらいの、別の啓蒙もしていかないと、もうどうにもならない時代がきてるんじゃないかと思う。

田積 しかし、それをね、ワースト的な要素ちゃうもんは、世の中にはたくさんあると思うんですね。パスに限らず、看板ひとつだってそうだろうし。だから、例えばワーストを挙げるうえにおいては、やっぱりベストであるという証言を我々はほんととはしなくちゃ絶対いけないと思うんです。提案していきける状態でなかったら、これからグラフィック・デザイナーというふうなものも、僕はやっぱり、市民権を得るという意味からいけば、そのへんまで本当はやらなダメでしょうね。それではなかったら、なんぼこれが赤がどうだとか、文字が多すぎるだとか、いろいろなこと言ってたって、それは納得できないし、そんなことではもうこれからは通用しないんじゃないかな、というよ

うな気がするんです。

森野 それに関連して発言したいんですけど。結局、日本の文化っていうのは、やっぱり一つの側面として木の文化やと思うんですね。現代、木の文化と石の文化が渾然となってる状態だと思うんです。だから、そういう意味において、街の景観を考える場合、やっぱり日本民族の歴史とかね、そういうふうなものをもっとベースにおいて考えていかないと、本当に進まない面があると思うんです。

田積 だから、そういう意味で、僕は今回の第七回のこの京都デザイン会議の意義っていうのは、このテーマ自体は、九つあったけど、たいしたテーマじゃなかったなという気はしますけれど、十一団体が主催したということにこの会議の意義があったような気がします。

先程言った、提言していくだとか、いろんなことをアピールするうえにおいての必要性っていうのは、そういう意味でも、これからこの十一団体が十二団体なり、十三団体になっていく必要性みたいな、それがやっぱり京都のもってるごついパワーになるのところがうかなと、そのように思います。今日はありがとうございました。

●出席者（発言順）

田積司朗（JAGDA） 奥田広幸（JAGDA）
嶋 高宏（KDA） 小林千枝子（JAGDA）
大野好之（JAGDA） 今村かすみ（デザイナー）
橋本繁美（JAGDA） 乾 和代（一般）
恩地 惇（KDA） 奥村厚人（JAGDA）
森野純巨（JAGDA） 小林弘和（日 図）

一般参加

二条城に天守閣をつくらう

キャピタル
城 首都 資本

天守閣に住まうは
美女か妖怪か
「天守物語」 どなたか
妖怪美女のパトロン
引き受けませんか

夢が形になると

山岡 二条城というのは平城^{ひらぎ}で、非常に華麗なる天守閣があったわけでありませうけれども、これを復元する場合に、昔のままに同じ素材をもつてやれというのは文化庁の考え方であります。先程理事長が羅城門をつくる時に、その場所はどこかと、こういうことをおっしゃっているように、本来復元というのは、非常に厳格性を帯びているということなんです。ところが私は、二条城復元に関しては別の考え方を持っています。なぜかと言いますと、土木建築で先人と覇を競うということになりますと、現代のモニュメントというのは、全く同じ素材でもってやるというのは不可能なんです。この二条城の復元というのは、現在のモニュメントとして考える、位置づける。そして外観だとか、そういうものにつまましては、やはり京都の景観にマッチする、または文化財としての名残りをとどめていくということになりますと、そういう色だとかデザインというものはそのままになりましようが、素材というものが例えば変わりに変わって、ファインセラミックスを使う。それから金の鯨に対してはゴールドセラミックスを使う。そういうものを使って、先人と覇を競いながら新しいものをつくりあげることが、私はモニュメントではないだろうかと思えるわけなんです。お金のことは言いませんでしたけれども、例えば今の福知山城ですね。先程、理事長がおっしゃっていましたように、あれ七億いくらでできているわけなんです。そして、市民からの浄財は一枚三

千円の瓦を、皆さんが寄付致しましたら五億いくら集まったそうです。だからほとんどの、七億のうち五億は市民が集めているわけですね。京都は、この天守閣をもしそういうもので見積りますと、恐らくファインセラミックスでつくるとなりまして、一兆円か二兆円かかるんじゃないかなという気がするわけなんです。しかし、それが全部タダでいただくのであるならば、それはもう別に問題ないわけでありますから、例えばこういうものを一人が、例えばお金を出す者はお金、それから体を出す者は体、知恵を出す者は知恵という具合に皆でつくりあげる。

榎 実はこの話を山岡さんのほうから聞きまして、いっちゃんやらんかというお話で、まず一番最初に感じたことは、そんなものはやめとけよと。私はどっちかいうたら反対だったんです。要するにこういう旧態依然としたものをつくっていいのかどうかと。しかし一つの文化運動として活動していく中で、我々の意識を向上させる、そういう事ができるんなら、一つの目標として建ててもいいんじゃないだろうかというふうに考えを変えてきました。で、発起人の一人となったわけなんです。

石川 私も榎さんと同じように発起人のメンバーなんですけれども、私も山岡さんにこういうような考えをもっておるんだというお話を聞きまして、私が一昨年より天竜寺さんのほうでお世話をかけております夢窓能、あれは、古いものばかりにこだわってるんじゃないに、そこに新しい何かを入れていかなければいけないという考えから始めま



したもんですから、そりゃ結構ですわね。現代の最高の材料を使って二条城をお建てになるのであれば、大変結構ですわねというので、自分の趣旨に合うようなお話でしたから、はい、はいと受けたわけなんですけれども。それじゃ、実際にどういう形で建てて、いつ頃で、というような話は、今日初めてお話をお聞きして、あ、これはほんとにもう具体的に進んでおるんならと、ちょっと頑張っってメンバーを集めたりせないかなという気になりつつあるところです。

塚本 私は長年映画の仕事をやってましたんで、それで、『大奥』とか全部やりましたんで、その辺かなりわかってるわけです。材料とかそんなんも、僕は過去に長浜城の昭和の再建、経験あるんです。やったことあるんです。

山岡 あ、長浜城の企画をなさった？

塚本 はあ。全部やっただですわ。イベントとか全部。ほんで、市長さんには企画書提出して、それを電通さんが実行しやしたわけですわ。そんなんもありますんで、向こうのやつは鉄骨でできてるわけですわ。鉄骨で。だから、別にどうもないと思うんですけどね、鉄骨で。ただし、やり方と一つとして博物館形式にせんと、税金が高いんですわ。取られるわけです。それに、多目的ホールちゅうのをつくりまして、そこで催し物やって客を集めると。そういうやり方せんと……これ木造でやってたら大変ですわ。

山岡 ちなみにね、私もこの間、こういうこと関心もって、熊本城行った時に、熊本城の三層の小さいので二十六億円、木造でかかったと。鉄骨で

やると、もうドゥーンと落ちるんですわね。

それ京都はね、今現在のところ、工芸博覧会やりましたり、今度は歴史都市博やりますわね。イベントホールというのをつくりますけれども、第二回内国博覧会というのが確かあれ、明治四年でしたかね。明治四年に第一回をやった時には、京都にパビリオンとしては西本願寺の書院が、第一回の博覧会場になってるはずなんですわ。第二回が確かあれは西本願寺と建仁寺と知恩院と、三つがパビリオンになって、ちょうど全部ともこれ、今のめてお寺と違うのね、これ、協力してるんですわ。で、その時の二条城、これ全然関係ないですね。まあその時は恐らくね、二条城ちゅうのは、宮内庁のね、なんやとかね、難しかったんちがいますか。いろいろあるんでしょう。

太田 太田さん市役所の人やけど、どう思う？

太田 そうですね。私もお城とかいうんじやなくて、市民のものを皆で有効利用するとか、現代の技術の粋でもってすばらしいステキなお城にするというのは現実的なことなので、いいと思いますし、それから、中で働く人たちがそういうふうな仮装したりしたら、すごく面白いなんかが出て、楽しいなと思います。

北条 僕は設計とか都市計画をやってるんですけども。今日参加したのは、先程の呼び込みの山岡さんのお話が非常に面白くて、京都にも面白いものがあるなと思いました。

何に興味をもったかというのと、やっぱりこれは夢とロマンについてだと思っんです。京都がやっぱり歴史あるとか言われながらも、もう一つ、い



まいち光らないようなね。皆が夢とロマンをね、やっぱりなくしてきたんじゃないか。そういう意味から言うたら、この天守閣復元というのはね、夢とロマンですから、あんまり焦ってやる必要はない。気長にやるほうがますますその夢もロマンも大きくなるし、それに集まってくる人の輪も広がってくるやろうし、そういうふうな手間暇かける中で、ほんとのいいもんがつくられていくんじゃないだろうか、ということでは。

私もやります 石運び

山岡 ありがとうございます。実はあんまり細かい規約もつくりたくない、なにもしない、お金のことも言わない、何も言わないというのは、まさに今、北条さんがおっしゃる夢とロマンをつくりたいというのがほんとの願望なんです。

古賀 ついこの間、ホテルの一番最上階なんかでラウンジとかございますよね。そこから見てまして、京都であまり高層ビルでございせんでしょう、そういうところから眺めると、あー、やっぱり京都で落ち着きたいのか、大都会的な雰囲気がないからこそ、いいなというようなところがあるんです。ですから、あまりケバケバしいネオンじゃなくても、どっから見てもこのお城が浮かびあがっていることを、ふっと、今日の山岡さんのお話聞いてまして、あ、きれいやろなという、単純な、そういうふうなことを思うたんです。

井上 私もこんな話があるというのは、今日初めて実は知ったんですけれども、友達が他から来ますね。そうすると京都で何年たっても変わらないて

言うんです。それで活気もないし、なにもないという話をよく聞くんですけれども、こういうお話があれば、町のものが集まって何か活気が生まれるんじゃないかということ、先程、ものすごくロマンと夢があるとおっしゃったんで、私もこれはもう実現するのかなと現実には思いましたけれども、そういう夢をやっぱし追ってみて、活気づけたほうが今西陣もどこもわりかた不況で駄目だと言われてますね。そういうところから、こういうものから何かひとつまた他のものでも、活気が出てくるんじゃないかなって、ふっと思ったんです。

平松 年に一回ぐらい、だいたい時候のええ時に家族とか、遠方の学生時代の友達が来ますと、二条城へ行くんですけども、桜も非常にきれいですしね。いま天守閣のあった跡じゃないかと思うんですが、南西の、本丸の、ね、石垣が残ってますね。向こうから下を見ると、だいたい堀とかね、向かいの学校なんか見えるんですけどね。二条城の外周をね、回ったところでは何も無いわけですね。こう見えますと、正門はわりと大きい横にも古い門、それに東の角んとこね、ちょっと櫓がありますな。あれぐらいでね、もう一つ頼りない。これ物をつくるとかね、修理するとかいうこと、だいたい自分が好きなんかもしりませんけどね。まあ、死ぬ時は、人間なんば緊張してもお金を持っていけんわけやし、なんかね、自分がこの世からなくなる時にすな、二条城の天守閣つくるとき、わしも参加したと、いろいろ手伝うたんやというような気持ちになりたいと。私も写真のほうの仕事してますんで、記録とか、土こねとか、そ



ういうことをできたらさしてほしいと、そういうように思っています。

辻井 お話を少し聞きました、そういったことで今日寄せていただいて、また私に最もぴったりのお話でして、あ、これはいいよ私の念願がかないそうやと、是非ひとつどんなことでもさしていただいで、やってみたいと思っています。まして私なんか、京都で生まれて、京都で育って、で、京都で死んでいくわけですからね。ひとつ爪痕をちょっとだけでもつけてね、協力したいと。そして、非常にこれは楽しい夢だと思ったことは、この中に一つも汚らしさがありませんわね。だいたい京都人というのは、がめつうて、細かくて、汚くて、お金を出すことやったら嫌だと。ところがこれやったら、なんかね、自分がやっぱり出したいような気持ちに、なんかね、そういった気持ちになるようなムードのいいお話やと。ひとつまた、生きているうちにですね、こういった楽しいお話が進めばいいことです。こうやって見ましたら、私が一番年長者ですし。

河原畑 私も今のお話のように、石川さんから、二条城に天守閣をたてるけど、今度それにひとつ参加しないかと。城が好きで、ちょっと前でですけど、子供を連れながら城回りのことがあるんです。京都にこんな人があったら、いいやろなと、思っております。

内田 僕も市内の建築設計事務所で働いているんです。僕は、天守閣があったっていうのを初めて今日知ったんですけどもね。できたら、僕は今の技術力やったら、こんなもん簡単にできると思う

んですわ。むしろその過程でね、京都で祭りちゅうのはありますけども、市民が参加できる祭りちゅうのはないですね。祇園祭りにしても、葵祭りにしても。

山岡 あれ、もう役の人が決まってるもんね。

内田 決まってますでしょう。シナリオが決まってる祭りやさかいに、だから僕は、この二条城つくるということ、一つの祭りとしてね、建ってしもうたら別に、そのあとは、ああ出来たんやな、てなもんで、それまでの過程が僕ものすごい大切なやうかいなと思うんです。

山岡 それじゃあ、その次に、まだ時間がありますから、イベントをやりますよう、計画しよう。今日やりましょうね。イベント計画して、すぐやりましょう。

内田 今日からですか？

山岡 そらそうですよ。(笑) 全部に意見を聞いてからね。

高橋さん、あんた一番若いし、名古屋の人やけど、名古屋城よりええのんつくってもかまへんか、ちょっと意見。

高橋 そらかまいせんわ。(笑) ただ、二条城でいうところは、まあ言うたら、美術工芸とか、云云とか、いろんな京都の文化がまだ遺されているところですね、そこに天守閣をたてるということですね、外観はどうなんですか？

北条 僕の今の気持ちとしては、あんまり今具体的なものにこだわる必要はないと思うんです。で、先程言った話の続きで、情報を発信したらいいということ。もう一つは、できることならば、これ

を京都の一つのシンボルにしたい。今まで京都という町は、いろんな情報を世界に向かって発信してたわけですね。そういう面ではインテリジェント・シティですが、どうもそれも古いと思うんです。もっと、いわゆるインテリア・シティとしての京都のシンボル、そのの、なんていいますか、拠点といえますか、センターにしたいなと思っています。

梶 先程、北条さんの言われたように、私は、いわゆる夢とロマンですね。これは京都発で全国へ売り出していく、特に京都というのは、日本人からすれば、日本の心の故郷ということでありながら、そのための動きを一切やってないというのが京都の現状だろうと思うんです。そういうふうな夢を、だから、石一つでもよろしいやないかとか運んでくるとか、それにしても、こういうふうなところで、日本の故郷を再度皆さんで見直しましょうやと。で、京都発と、京都から全国へアピールしていく、京都の人間だけでこういうようなものをつくりましょうというのじゃなく、日本中で皆これをつくりやすいかというふうな形にしていく。

夢情報・京都から

山岡 いろいろ皆さんの意見が積み重なって、今現在では集約する必要はないんですが、発信基地としての京都というものをもう一回見直そうやないか。見直すというところがないと、全てニュース、ラジオ、テレビでも東京のニュースがもう小さいものでも誇大化されて全国に伝播していくと。

ちょっと面白いやないかと、京都人としてはね。京都発のニュースを全国に流したい。

(遅れて、河崎さん、山本さん、団さん、伊藤さんが参加)

山本 もうちょっと聞かせてもうて。ほんまに建てる気があんのんですか。それやったらそれなりのことやらしてもらいますけど。(笑)

山岡 いや、皆ね、ほんとに建てる気があるんですわ。

山本 それならね、さっき言うたはったように、木とか石垣の一つでもね、手当てをね、一人一人が、あそこにああいう石があるでえとか、皆がそういう具合に思うていったらね、自然と建つんやないかと。ほんで、かなり大規模な計画をしてね、まあ、国とか市が止めるに入るぐらいのね。

塚本 建物の敷地が重要文化財とか、そんなことがありますがからね、国の制約はきついですよ。

山本 今おっしゃってるように、国が重要文化財やと言おうとなんと言おうと、そんなん関わりなくね、計画を進めるところに、またええところあると思うんですね。

山岡 文化財見直し論みたいなもんも、そろそこで起こるということも僕はいいことやと思うんです。僕はね、ヘリクツを言うんですわ。そんだけ現在の文化財が大事なやつたらね、二条城を建てた時には旧文化財は破壊しとるわけです。あの下を掘ると、縄文式のね、文化が出てくるんですわ。これ、どうしたらええんです？というふうなヘリクツもね、文化庁に言ってみたいわけです。

これ今日、歴史的会議ですよ、これ記録にとら



れてですよ。ほんまにこれ、二条城が建った時は、あの時の設立発起人の名はですね、ちゃんと名簿に、写真も撮られたわけですから。これは罪が重いわけで(笑)。

それで、プレイベントをね、これまた考えたいと思うんですよ。

内田 イベントはね、市とか府が入ってくるとね、すごい堅苦しいとか、制約があるさかいに、あくまでも協賛程度にしておいてほしい。

山岡 なるほど。正会員には入れないわけね。一般人以外はもう。

梅 あれは要するに京都市のものであって、皆のもんであるという認識をね。

山岡 あ、もたなあかんね。それを皆さんね、もたなあかんね。

そらそうやわね。日頃から、管理費の一部を僕らがちょっと。入場料いうたら違うのね。管理費の一部を払わしていただいとるわけやから。

平松 ああいうと、記念の植樹するっちゃうのは？

河崎 記念の植樹もええけど、石は置いたらあかんのですか。記念の石は？ 石垣のんを一つずつ記念に置いてくるんです。(笑)陣取りしていく。

北条 長いことかかってやりましょうや。別に千二百年を目標にせんでも。先に長いほうが楽しみがありますよ。

内田 どこか百貨店かどこかでね、幼稚園と保育園の園児に一遍二条城のイメージスケッチを描かして、イメージの展覧会をするんですわ。こんな二条城があんねんやなと市民レベルで考えてもう

て、そこから始めるていうような。幼稚園とか児童の描く絵ていうのは、ものすごう、大人がびっくりするようなもんがありますからね。

山岡 今日、皆さん、締めくくりというようなことはないんですけども、やっぱり夢とロマンの二条城天守閣を建てませんかということ、これ皆さんの手で建てましょうと、スポンサーがつくのではなくて、皆のアイデア、だから、知恵のある人は知恵を貸すと、そしてお金ある人はお金を出すと、物のある人は物を寄付すると、何にもない人は口だけでもええから出してもらうと。そういうことで、なんでもいいから沈滞している京都の空気をがらっと変えるために京都でそういうものを建てようじゃないか、そして夢とロマンをつくらうじゃないか。そして情報の発信基地としての京都、そういうものを全日本、または全世界に知らしめようではないか、ということ、頑張っていきたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

●出席者(発言順)

山岡景一郎(一般)	河原畑久男(一般)
梅 正隆(一般)	内田正弘(一般)
石川公三(一般)	高橋公博(一般)
塚本隆治(室内)	山本則次(日)
太田貴子(一般)	河崎悦二(日)
北条 誠(建築)	伊藤之久(日)
古賀みつ子(NDK)	大木ミヤ子(KDA)
井上利子(NDK)	馬場美千子(一般)
平松堅二(KDA)	小原源一郎(一般)
辻井睦治(一般)	

第七回 京都デザイン会議・参加者名簿

(五十音順・敬称略)

社団法人日本図案家協会(日図)

赤石 逸三 伊藤 之久 大石 浩司 大北 捷一 片桐 嘉正 河崎 悦二 金原 保則
熊谷 實 小林 弘和 齊藤 勝哉 佐々浪昌夫 谷口 弘明 田村 義一 団 武夫
深津 昭夫 藤木 武久 山口 晴司 山本 則次 米田 健一
京都服飾デザイナー協会(KDK)

上田 年子 梅沢 弘子 小山 道子 塩山 秀子 辻 美菜子 中橋 貞子 山本 次枝
社団法人日本デザイン文化協会 京都支部(NDK)

浅井 幸 井上 利子 井上美恵子 木下 昌美 古賀みつ子 高瀬 肥子 仲 絹代
水口あき恵 村上欣美枝

京都伝統産業青年会(伝青)

谷口 主嘉 谷口 秀二

京都インテリア産業協会(KIS)

大村 俊雄 角田 康 柏木 桂 岸本 康志 野々村道信 本郷大田子

社団法人京都デザイン協会(KDA)

今西 慧 大木ミヤ子 尾崎 要 恩地 惇 河合 玲 木村紀久雄 柴田 献一
柴田 裕 嶋 高宏 志磨村ひろみ 仁位 良一 平松 堅二 藤田 頼伯 真鍋 宗平
山本唯与志 山本 竜一



京都室内装備設計士協会（室内）

尼川 恵一 井口 明夫 木下 長生 澤野 周二 塚本 隆治 藤川 一光 藤本 進

米田 匡宏

協同組合京都クラフトセンター（KCC）

浅田 篤志 池川 禎亮 木曾 宗統 竹村 昭彦 田中 良一 簇持 宏 藤原 昭

宮井 欣二 森 勝久

京都建築設計監理協会（建築）

浅岡 幹夫 内丸 恵一 齊藤 隆三 坂本 克也 長戸 幸雄 北条 誠 松田 緑

三輪 泰司 山本 達哉

社団法人日本グラフィックデザイナー協会京都地区（JAGDA）

大野 好之 奥田 広幸 奥村 厚人 小林 千枝子 田積 司朗 橋本 繁美 久谷 政樹

松本 好雄 森野 純巨

社団法人京都国際工芸センター（ICC）

遠藤 泰一 太田 玉重 小川 幸雄 黒竹 節人 木幡光三郎 新宮 克美 中谷 浩志

林 暁子 正木 友梨 松本 俳沙

一般

池田 敏彦 石川 公三 稲田 勝彦 乾 和代 岩坂 好和 内田 正弘 江畑 武美

大倉 達也 太田 貴子 岡本 透 甲斐 竹子 加々美佳呼 河原畑久男 久保内信子

小林 郁央 小原源一郎 小山 寛治 逆井 宏 神保徹一郎 柴田富佐子 鈴木 宗敬

須田 照子 大誠寺陽子 高瀬 公博 梅 正隆 土井 妙子 辻井 睦治 中沢美代子

中島 慶子 長岡 要 西川 昭子 西田 永子 能 英樹 馬場美千子 東田 崇資

日根野祐子 松原 義美 松本 静明 松本 良 山岡景一郎 吉村 文男 吉村 元男

御招待

木下 総（財平安建都千二百年記念協会理事長） 大橋 哲夫（財平安建都千二百年記念協会事務局次長）

西口 光博（京都市経済局商工部伝統産業課長） 上羽 章夫（京都市経済局伝統産業課染織係長）

岩崎 猛（京都市経済局伝統産業課）

篠原 秋良（財国際デザイン交流協会） 裏井 紳介（京都織物卸商業組合青年部会）

松田 豊（奈良デザイン協会） 今村かすみ（神戸デザイナーズ協会）

海野 謙二（サンケイ新聞京都支局）

公文 茂人（京都新聞社文化事業部）

京都銀行

京都信用金庫

京都中央信用金庫

伏見信用金庫

西陣信用金庫

京都相互銀行

第七回 京都デザイン会議・会議録

発行・昭和六十二年五月三十一日

編集・京都デザイン会議実行委員会

エディション アルシーヴ

撮影・スタジオ 写洛

事務局・京都デザイン関連団体協議会（京デ協）

〒六〇五 京都市東山区祇園町北側二七五

ABL三階・（社）京都デザイン協会内

電話（〇七五）五四一—〇二三九

印刷製本・室町印刷

